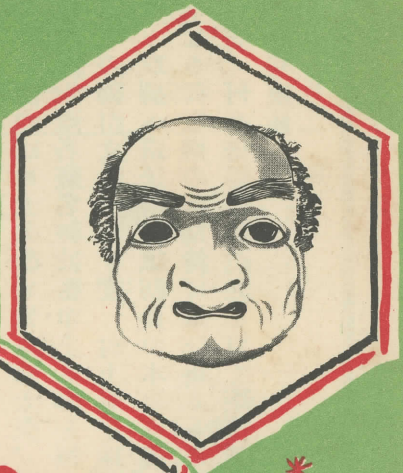
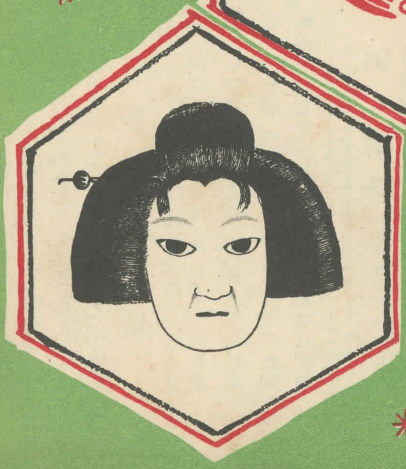
大阪 文樂座人形淨瑠璃繪葉書

全員引幾特別興行





昭和十五年秋季
淨瑠璃月番

淨瑠璃橋演舞場

淨正園

乍憚口上

御ひゐき皆々様彌々御清祥の段大慶至極に奉存候扨て當る七月興行の儀は當場十年振りにて大阪名物文樂座人形淨瑠璃を迎へ本邦特有の由緒深き世界に誇る古典藝術の御鑑賞を願ふ事と相成り候太夫、三味線、人形遣も斯界の一流全員久々にて上京仕り懸命の努力を以て御高覧に可供候殊にこの度つばめ太夫改め竹本織太夫、團二郎改め竹澤團六兩名襲名御披露申上る事と相成候條相變らずの御引立希上奉り度　尚上演狂言の儀も名曲數々取揃へ國民精神總動員の本領に從ひ必ずや健全なる御慰樂の御期待に添ひ得るものと確信仕り候間　何卒倍舊の御引立を以て陸續御來觀の程伏て奉懇願候

七月一日

敬白

昭和十三年七月興行
一日より十三日まで（十三日間）
毎日午後四時開演

第一回狂言　一日より四日まで四日間
第二回狂言　五日より七日まで三日間
第三回狂言　八日より十日まで三日間
第四回狂言　十一日より十三日まで三日間

御入場料（税共）

一等　四圓八拾錢
二等　二圓
三等　一圓八拾錢

切符賣場
團體事務所
電話
銀座〔57〕
三一八三七七
二九一七五五
七〇七六八七

京橋區木挽町六丁目九番地
新橋演舞場

大阪文樂座人形淨瑠璃

全員引越特別興行

第四回藝題

（十一日より十三日まで）三日間

假名手本忠臣藏

殿中刄傷のだん
花籠のだん
霞ヶ關のだん
早野勘平住家のだん
道行戀の初旅
兩國橋勢揃ひのだん
裏門のだん
判官切腹のだん
身賣のだん
祇園一力茶屋のだん
山科閑居のだん

太夫・三味線連名

竹本長尾太夫
鶴澤寛治郎

竹本土佐夫太夫
竹本相瀨太夫
豐澤廣若

豐竹松島太夫
鶴澤一郎右衛門

竹本隅若太夫
鶴澤清友

豐竹宮太夫
鶴澤友三郎

竹本津摩太夫
野澤吉季

竹本さの太夫
豐澤新太郎

竹本播路太夫
豐澤團伊三

豐竹辰太夫
野澤吉左

竹本伊達太夫
鶴澤友衛門

竹本織太夫（つばめ太夫改メ）
竹澤團六（團二郎改メ）

豐竹呂太夫
鶴澤叶

竹本相生太夫
鶴澤道八

竹本大隅太夫
豐澤廣助

竹本錣太夫
豐澤新左衛門

豐竹古靭太夫
鶴澤清六

竹本津太夫
鶴澤綱造

人形遣連名

吉田玉幸　桐竹門次
桐竹紋太郎　吉田玉男
吉田瓢壽呂　吉田文枝
吉田兵次　吉田玉昇
吉田光之助　吉田文二郎
吉田榮三郎　吉田多三郎
桐竹紋司　吉田文之助
吉田利男　吉田萬次郎
吉田藤一　吉田玉市
吉田玉丸　吉田文作
桐竹紋昇　吉田玉米
吉田玉德　桐竹門造

吉田榮三
吉田文五郎
吉田玉次郎
吉田玉七
桐竹政龜
吉田小兵吉
吉田玉藏
桐竹紋十郎

はやし　小川彌三郎

殿中刄傷のだん

豐竹呂太夫
鶴澤叶

人形

桃井若狹之助　吉田文作
高野師直　桐竹門造
茶道珍才　桐竹紋司
鹽谷判官　桐竹紋十郎
加古川本藏　吉田玉藏
諸大名　大ぜい

假名手本忠臣藏

殿中刄傷の段より
兩國橋勢揃ひ迄

此の『假名手本忠臣藏』は寛延元年八月の（今から百八十餘年前）竹本座の操にかけられたもので、竹田出雲が正、三好松洛、並木千柳等が補で書卸された日本演劇史を以表する最大傑作であると共に、其の破亂曲折の裡に、日本武士道の精華を物語る不朽の名作で有ります。

時正に非常時、是の上演が國民精神作興の一助ともなれば、歡喜これに優るものはないので有ります。

殿中刄傷の段

床本

脇能過て御樂屋に鼓の調べ太鼓の音天下泰平繁昌の壽祝ふ直義公御機嫌斜ならざりける。若狹之助は兼て待つ師直遲しと御殿の内奥を窺ふ長袴の紐しめくゝり氣配し儕師直眞ッ二つと刀の鯉口息を詰め待つ共知らぬ師直主從遠目に見付け是は／＼若狹之助殿扨々お早い御登城イヤハヤ我折りました。我等閉口／＼イヤ閉口序に貴殿に言譯致しお詫申事が有ると兩腰ぐはらりと投出し若狹之助殿改めて申さねばならぬ一通り日外鶴ヶ岡で拙者が申した過言ヲ、お腹が立

つたで有ろふ尤じやがそこをお詫、其時はどふやらした詞の間違ひでつい申た我等一生の麁急武士がコレ手をさげる眞ぴら〳〵假令其元が物馴れたお人なりやこそ外々の狼藉者で見さつしやれ。此師直眞ッ二つこはや〳〵有やうが其節貴殿の後かげ手を合して拜ましたアハヽアヽ年寄るとやくたい〳〵年にめんじて御免〳〵コレサ〳〵武士が刀を投げ出し手を合す。是程に申すのを聞入れぬ貴公でもないはさ。とかく幾重にも誤り〳〵伴内ともゞ〳〵にお詫〳〵と金が言はする追蹤とは夢にもしらぬ若狭之助刀きみし腕も拍手拔今さら拔に拔かれもせず寂刄合はせし刀の手前さしうつむきし思案顏小柴のかげには本藏が瞬もせずまもり居る、ナニ伴内此鹽谷はなぜ遲い若狭之助殿とはきつい違ひ扨〳〵不行儀者、今において頬出しせぬ主が主なれば家老で候迎諸事に細心のつくやつが一人もないイザ〳〵若狭之助殿御前へ御供致そ。サアお立ちなされ、サアササア師直めゝ誤つておるぞコリヤ爰な粹め〳〵粹様めイヤ若狭之助最前からちと心惡ふござるマア先へ何とした〳〵腹痛かコレサ伴内お脊〳〵お藥進じよかなイヤ〳〵それ程にもござらぬ然らば少しの内お寛御前の首尾は我等がよい様に申し上る。伴内一間へお供申せ、と主從寄つてお輦に迷惑ながら若狭之助是はと思へど是非なくも奥の一間へ入りければアヽもふ樂じやと本藏は天を拜し地を拜しお次の間にぞ控へ居る。程もあらさず鹽谷判官御前へ通る長廊下師直呼びかけ遲し〳〵何と心得てござる、今日は正七ッ時と先刻から申し渡したでないか成程遲なはりしは不調法、去りながら御前へ出るはまだ間もあらんと、袱より文箱取出し最前手前の家來が貴公へお渡し申くれよ、則奥かほよ方より參りしと渡せば受取成程〳〵イヤ其元の御内室は扨々心懸がござるは手前が和歌の道に心を寄するを聞き添削を賴むと有ろ定て其事なら

んと押開きさなきだにおもきが上のさよ衣我つまならぬつまな重ねそハア是は新古今の歌此古歌に添削とはム、〳〵と思案の内我戀の叶はぬ證拠は夫に打ち明しと思ふ怒をさあらぬ顔判官殿此歌御らふじたでござらふィヤ只今見ましたム、手前が讀のをいかにも、アノ貴殿の奥方はきつい貞女でござる。ちよつと遣はさるゝ歌が是じや、つまならぬつまな重ねそアア貞女〳〵ア、其元はあやかり者登城も遲なはる筈の事、内に斗りへばり付てござるによつて御前の方はお構ないじやと當こする雜言過言あちらの喧嘩の門違ひと判官さらに合點行かずむつとせしが押しづめハ、ハ、、コレハ〳〵師直殿には御酒機嫌か、御酒參つたの、いつもらしやつた、イヤいつ呑ました御酒下されても呑いでも勤る所はきつと勤る、貴公はなぜ遲かつたの御酒參つたか、イヤ内にへばり付いてござつたか、貴殿より若狭之助殿ア、格別勤られます、イヤ又其元の奥方は貞女といひ御器量と申手跡は見事御自慢なされむつとなされなうそはないはさ、今日御前にはお取込み手前迎も同前、其中へ鼻毛らしいイヤ是は手前が奥が歌でござる。それ程内が大事なら御出御無用惣體貴様のやうな内に斗り居る者を井戸の鮒だといふ喩が有、これや後學のため聞て置かしやい、彼の鮒めがわづか三尺か四尺の井の中を天にも地にもない様に思ふて不斷外を見る事がない所に彼井戸がへに釣瓶に付てあがりますそれを川へ放しやると何が内に斗り居るやつじやによつて、悦んで途を失ひ彼方の橋板で、鼻柱をぴしやり又此方の橋板では鼻柱をぴしやりにぴり〳〵〳〵と死にまするサ彼の鮒めが鮒が貴様か貴様が鮒か鮒よ〳〵貴様も丁ど鮒と同じ事ハ、、、、鮒だ〳〵鮒士だウと出ほうだい判官腹にすへかねこりやこなた狂氣めさつたかイヤ氣が違ふたか師直ムヤこいつ武士を拂へて氣違ひとは出頭第一武藏守高野師直ム、

裏門の殿

竹本伊達太夫
鶴澤友衛門

人形

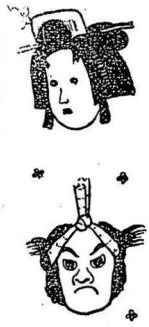
早野勘平　吉田榮三
腰元おかる　吉田文五郎
驚阪伴内　吉田玉德
取巻大ぜい

すりや先方よりの悪言はおみや本性よな、くどいく〳〵又本性なりやどふするヲヽかうすると拔討ちにまつこうへ切り付くる眉間の大疵是はと怯む身のかはし烏帽子の頭二つに切り又切りかゝるを拔けつくゞりつ逃廻る折りも有れお次に控へし本藏走出て押しとゞめコレ判官様御短慮と抱とむる其際に師直は館をさしてこけつ轉びつ逃行けば儕れ師直眞二つ放せ本藏放しやれとせり合内館も俄に騷出し家中の諸武士大小名押へて刀もぎ取るやら師直を介抱やら上を下へと

裏門の段

立騷ぐ表御門裏御門兩方打たる館の騷動提灯ひらめく大騷ぎ早野勘平うろ〳〵眼走歸つて裏御門碎けよ破よと打たゝき大聲上鹽谷判官の御内早野勘平主人の安否心もとなし爰明けてたべ早く〳〵と呼はつたり門内よりも聲高に御用有らば表へ廻れ爰は裏門成る程裏門合點表御門は家中の大勢早馬にて寄付かれず喧嘩の様子は何んと〳〵喧嘩の次第相濟んだ出つ頭の師直様へ慮外致せし科によつて鹽谷判官は閉門仰せ付けられ網乘物にてたつた今歸られしと聞くよりハアなむ三寶おやしきへと走りかゝつてイヤ〳〵〳〵閉門ならば館へは猶歸られじと行きつ戻りつ思案最中腰元おかる道にてはぐれ

ヤア勘平殿様子は残らず聞きました。コリヤ何んとせふどふせふと取付き歎くを取て突退エ、めろめろとほへ頬コリヤ勘平が武士は捨つたはやいもふ是迄と刀の柄コレ待つてくだされコリヤ狼狽てか勘平殿ヲヽうろたへた是が狼狽ずに居られふか主人一生懸命の場にも有合はさず剰へ囚人同然の網乗物お屋敷は閉門其家來は色にふけり御供にはずれしと人仲へ兩腰さして出られふか爰を放せヤヽヽ待つて下さんせ尤じや道理ぢやがそのうろたへ武士には誰がした。皆わしが心から死ぬる道ならお前より私が先へ死なねばならぬ今お前が死んだらば誰が侍じやと歎まする。爰をとつくりと聞請けて私が親里へまづきて下さんせとゝ様もかゝ様も在所でこそあれ頼もしい人もふかう成た因果ぢやと思ふて女房のいふ事も聞いて下され勘平殿とわつと斗りに泣しづむ、そふじやもつともそちは新參なれば委細の事は得しろまい。お家の執權大星由良之助殿いまだ本國より歸られず歸國を待つてお詫びせんサア一時なり共急がんと身拵へする所へ鷲坂伴内家來引連れかけ出ヤア勘平うぬが主人判官師直様へ慮外を働きかすり疵負せし科によつて屋敷は閉門追付け首が飛は知れた事サア腕廻せつれ歸つてなぶり切りかくがひろげとひしめけばよい所へ鷲坂伴内儕れ一羽で喰ひたらねど勘平が腕の細ねぶか料理鹽梅くふて見よイヤ物ないはすな家來共畏まつたと兩方より捕つたとかゝるをまつかせとかいくゞり兩手に兩腕捻じ上ぱつし〳〵と蹴かへせばかはつて切り込む切つ先を刀の鞘にて丁とうけ迫つてくるを襠と柄にてのつけにそらし四人一所に切りかゝるを右と左りへ一時に田樂返しにばた〳〵〳〵と打ちすへられ皆ちり〳〵に行く後へ伴内いらつて切りかくる引ぱづしそつ首握り大地へどうともんどり打たせしつかと踏付けサアどうせふとこつちの儘突ふか切らふかなぶり殺しと振上る刀に縋つてコ



花籠のだん

つばめ太夫改　竹本織太夫
團二郎改　豐澤團六

判官切腹の段

切　竹本大隅太夫
豐澤廣助

人形

顔世御門　桐竹政龜
大星力彌　吉田榮三郎
原郷右衛門　吉田小兵吉
斧九太夫　桐竹紋太郎
石堂右馬之丞　吉田玉藏
藥師寺次郎左衛門　吉田玉幸
鹽谷判官　桐竹紋十郎
大星由良之助　吉田榮三
諸士　大ぜい

レ〳〵そいつ殺すとお詫の邪魔もふよいわいなと留る間に足の下をばこそ〳〵と尻に尾のない驚坂は命から〴〵逃て行くエヽ殘念〳〵去りながらきやつをばさば不忠の不忠一先づ夫婦が身を隱し時節を待つて願ふて見ん最早明け六ツ東がしらむ横雲にねぐらを離れ飛からすかはい〳〵の女夫づれ道は急げど後へ引く主人の御身いかゞぞと案じ行こそ浮世なれ。

扇ケ谷の段

鹽谷判官閑居によつて扇ケ谷の上屋敷大竹にて門戸を閉家中の外は出入をとゞめ事嚴重に見へにけりかゝる折にも花やかに奥は媚く女中の遊び御臺所かほよ御前お傍には大星力彌殿の御氣を慰めんと鎌倉山の八重九重色々櫻花籠に生らるゝ花よりも生る人こそ花紅葉柳の間の廊下を傳ひ諸士頭原郷右衛門後に續いて斧九太夫是は〳〵力彌殿早い御出仕イヤ某も本國より親共が參る迄晝夜相詰め罷り有るそれは御奇特千萬と郷右衛門兩手をつき今日殿の御機嫌はいかゞお渡り遊ばさるゝと申し上ぐればかほよ御前ヲヽ二人共太儀〳〵此度は判官樣お氣詰りに思し召おしつらひでも出よふかと案じたとは格別明暮築山の花ざかり御らふじて御機嫌のよいお顔ばせ夫故に自もお慰に指上げふと名有る櫻を取寄

せて見やる通りの花拵へヽいかさま様にも仰せの通り花は開く物なれば御門も開き閉門を御赦さるゝ吉事の御趣向拙者も何がなと存ずれどかやうな事の思ひ付きは無調法なる郷右衛門ヤア肝心の事申し上ん今日御上使のお出と承はりしが定めて殿の御閉門を御赦さるゝ御上使ならん何んと丸太夫殿そふは思し召されぬかハヽヽヽコレ郷右衛門殿此花といふ物も當分人の目を悅ばす斗り風が吹けば散り失るこなたの詞もまづ其如く人の心を悅ばさふ迎武士に似合はぬぬらりくらりと後からはげる正月詞なぜとおいやれ此度殿の御落度は饗應の御役儀を蒙りながら執事たる人に手を負せ館を騷がし科輕ふて流罪重ふて切腹じたい又師直公に敵對は殿の御不覺と聞きもあへず郷右衛門扨は其方殿の流罪切腹を願はるるかイヤ願ひは致さねど詞をかざらず眞實を申のじやもとをいへば郷右衛門殿こなたの惜しはざからおこつた事金銀を以て頬をはり召さるればか様な事は出來申さぬと己が心に引當てゝ慾面打けす郷右衛門人に媚諂ふは侍でない武士でないナウ力彌殿何んとそふでは有るまいかと詞の角をなだむる御臺二人共に爭ひ無用今度夫の御難儀なさるゝ元の發りは此かほよ日外鶴ケ岡で饗應の折から道知らずの師直主の有る自に無體な戀をいひかけさまゞ〳〵とくどきしが恥をあだへ懲させんと判官様にもしらさず歌の點に事寄さよ衣の歌を書き恥しめてやつたれば戀の叶はぬ意趣ばらしに判官様に惡口元より短氣なお生れ付得勘忍なされぬはお道理でないかいのと語り給へば郷右衛門力彌も俱に御主君の御憤りを察し入心外面に現はせり早御上使の御出と玄關廣間ひしめけば奥へかくと通じさせ御臺所も座を下り三人出向ふ間もなく入來る上使は石堂右馬之丞師直が昵近藥師寺治郎左衛門役目なれば罷り通ると會釋もなく上座に着けば一間の内より鹽谷判官しづしづと立出是は〳〵御上使と有て石

堂殿御苦勞千萬先づお盃の用意せよ御上使の趣承はりいづれもと一ッ獻酌積うつを嗜し申さんヲ、それよふござろ藥師寺もお聞致さふ。したが上意を聞れたか酒も咽喉へは通るまいとあざ笑へば右馬之丞我々今日上使に立つたる其趣具に承知せられよと懷中より御書取出し押ひらけば判官も席あらため承る其文言此度鹽谷判官高定私の宿意をもつて執事高師直を刃傷に及び館を騷せし科によつて國郡を沒收し切腹申し付ける者なり。聞よりはつと驚く御臺並居る諸士と顏見合せ呆れ果たる斗りなり判官動ずる氣色もなく御上意の趣委細承知仕る扨これからは各の御苦勞休めに打ちくつろいで御酒一つコレ〳〵判官だまり召され其方が今度の科はしばり首にも及ぶべき所お上の慈悲を以て切腹仰付けらるゝを有りがたふ思ひ早速用思もすべき筈殊に以て切腹には定つた法の有る物それに何んぞや當世樣の長羽織そべら〴〵としらるゝは酒興か但し血迷ふたか上使に立つたる石堂殿此藥師寺へ不作法ときめつくればにつこと笑ひ此判官酒興もせず血迷もせぬ今日上使と聞くよりも斯あらんと期したるゆへ兼ての覺悟見すべしと大小羽織を脫捨れば下には用意の白小袖無紋の上下死裝束皆々是はと驚けば藥師寺は言句も出ず顏ふくらして閉口す。右馬之丞さしよつて御心底察し入則ち拙者檢使の役心しづかに御覺悟アゝ御深切忝なしそも刃傷に及びしより斯あらんと兼ての覺悟アらむらくば館にて加古川本藏に抱き留られ師直を討もらし無念骨髓に通つて忘れがたし湊川にて楠正成最後の一念によつて生を引くといひし如く生れかはり死かはり憤慨を嗜らさんと怒りの聲と諸共にお次の襖打たゝき一家中の者共殿の御存生に御尊顏を拜したき願ひ御前へ推參致さんや鄕右衞門殿お取次と家中の聲に聞ゆれば鄕右衞門御前に向ひいかゞはからひ候はんフウ尤なる願ひなれ共由良之助が

参る迄御用〳〵はつと斗り一間に向ひ聞かるゝ通りの御意なれば一人も叶わぬ〳〵諸士は返す詞もなく一間もひつそりとしづまりける。力彌御意を承り兼て用意の腹切刀御前に直すれば心靜に肩衣取り退座をくつろげコレ〳〵御檢使御見屆け下さるべしと三方引きよせ九寸五分押戴き力彌〳〵ハヽ〳〵ハア由良之助は末參上仕りませぬフウア存生に對面せず殘念力彌〳〵由良之助はテ殘り多やな是非に及ばぬ是迄と刀逆手に取り直し弓手に突き立引き廻はす御臺二た目と見もやらず口に稱名目に涙廊下の襖踏開きかけ込大星由良之助主君の有樣見るよりもハヽはつと斗りにどふと伏す後に續いて千崎矢間其外の一家中ばらばらとかけ入たり國家老大星由良之助只今當着仕りました。ナニ國家老大星由良之助となアヽくるしうない近うハア近うハア近う近う〳〵ハア〳〵ハヽヽヽヽヤレ由良之助待兼たはやいハア御存生の御尊顏を拜し身に取て何程かヲヽ我も滿足〳〵定めて仔細聞たであろ聞たか〳〵エヽ無念口惜いはやいハヽアアイヤ委細承知仕る此期に及び申し上る詞もなし只御最後の尋常を願はしう存じまする。ヲヽいふにや及ぶと諸手をかけぐつ〳〵と引廻はし苦しき息をほつとつぎ由良之助此九寸五分は汝へ筐ナヽハヽ我鬱憤を晴らせよと切つ先きにてふゑ刎切り血刀投出しうつぶせにどうと轉び息絶れば御臺を始め並居る家中眼を閉息を詰め齒をくひしばり控ゆれば由良之助にじり寄り刀取上げ押し戴き血に染る切先を打ち守り〳〵拳を握り無念の涙はら〳〵〳〵判官の末期の一句五臟六腑にしみ渡り扨こそ末世に大星が忠心義心の名を上げし根ざしは斯くとしられけり藥師寺はつゝ立ち上り判官がくたばるからは早〳〵屋敷を明け渡せイヤさは言れな藥師寺いはゞ一國一城の主ヤナニ旁々葬々の儀式取まかなひ心靜に立退れよ此石堂は檢使の役目切腹を見屆けたれば

霞ケ關のだん

竹本　長尾太夫
鶴澤一郎右衞門

人形

大星　由良之助　吉田榮三

是旨を言上せんナニ由良之助殿御愁傷察し入る用事有らば承はらんかならず心おかれなと並居る諸士に目禮し悠々として立歸る。此藥師寺も死骸片付ける其間奥の間で休息せふ。家來參れと呼出し家中共がゞらくた道具門前へほり出せ判官が所持の道具俄浪人にまげられなと館の四方をねめ廻し一間の内へ入にける。御臺はわつと聲を上扨も〳〵武士の身の上程悲しい物の有るべきか今夫の御最期にいゝたい事は山々なれど未練なと御上使のさげしみが恥かしさに今迄こらへて居たはいのいとをしの有様やと亡骸に抱き付前後もわかず泣賜ふ力彌參れ御臺所諸共亡君の御骸を御菩提所光明寺へ早々送り奉れ山良之助も後より追付き葬々の儀式取り行はん堀矢間小寺間其外の一家中道のけいご致されよと詞の下より御乘物手舁にかきすへ戸を開き皆立ち寄つて御死骸涙と俱に乘せ奉りしづ〳〵とかき上ぐれば御臺所は正體なく歎き賜ふを慰めて諸士のめん〳〵我れ一と御乘物に引添〳〵御菩提。

霞ケ關の段

御菩提所へと急ぎ行人々御骸見送つて座につけば斧九太夫何に大星殿其元は御親父八幡六郎殿よりの家老職、拙者迚も其右には座せ共今日より浪人となり妻子を育術

なし殿の貯へ置き賜ふ御用金を配分し早く屋敷をわたさずば藥師寺殿へ無禮ならんイヤ千崎が存ずるにはさす敵の高師直存命なるが我々が欝憤討つ手を引受け此館を枕としてア、これ／＼討死とは悪い了簡親九太夫の申さゝ通り屋敷を渡し金銀を分けて取るが上分別と評議の中に由良之助默然として居たりしが只今の評定に彌五郎の所存んと我胸中一致せりいはゞ亡君の御爲に我々殉死すべき筈、むざ／＼と腹切らふより足利の討手を待受け討死と一決せり、ヤア何んと言はゝ能評諚かと思へば浪人の痩顏はり足利殿に弓ひかふア、夫は無分別マア此九太夫合點がいかぬヲ、親父殿そふじや／＼此定九郎も其意を得ぬ此談合にははぶいて貰ふ長居は無益お歸りなされそれよかろ、いづれもゆるりと居めさゝれと親子打連れ立歸るヤア慾頻の斧親子討死を聞きおぢして逃歸つたる憶病者きやつ構はずと大星殿、討手を待つ御用意／＼ア、騷がれな彌五郎足利殿に何恨み有て弓引くべき彼等親子が心底をさぐらん爲の計略、藥師寺に屋敷を渡し思ひ／＼に當所を立退き都山科にて再會し胸中殘さず打明けて評議をしめんと言ふ間もあらせず次郎左衞門一間を立出ハテべん／＼と長詮議死骸片付たら早く屋敷を明け渡せと、いがみかゝれば鄕右衞門ア、成程お待兼ね亡君所持の御道具其外の武具馬具迄よく／＼改め受け取られよサア由良之助殿退散有れヲ、心得たりとしづ／＼と立上り御先祖代々我々も代々晝夜詰めたる館の内けふを限りと思ふにぞ名殘り惜しげに見返り／＼御門外へ立出れば御骸送り奉り力彌矢間堀、小寺迫々に馳歸り扨は屋敷をお渡し有たか此うへは直義の討手を引受け討死せんとはやり立てば由良之助イヤ／＼今死すべき所にあらず是を見よ旁々と亡君の御筐を拔き放し此きつさきには我君の御血をあやし御無念の魂を殘されし九寸五分此刀にて師直が首かき切つて本意を

身賣の段

竹本相生太夫

鶴澤道八

とげん實尤と諸武士の勇屋敷の内には藥師寺次郎左衛門の貫の木はつしと立てさせ師直公の罰が當り扨よいざま〳〵と家來一度に手を叩きどつと笑ふ鯨のこえアレ聞かれよと若侍取て返すを由良之助先君の御憤り晴さんと思ふ所存はないか、はつと一度に立出しが思へば無念と館の内をふりかへり〳〵はつたと睨んで立出る。

身賣の段

みさき踊りがしゆんだる程に親仁出て見やばゞんつばんつれて親仁出て見やばゝんつ麥かつ音の在所歌所も名におふ山崎の小百姓與一兵衛が埴生の住家今は早野勘平が浪々の身の隱れ里女房おかるは寢亂れし髪取り上んと櫛箱のあかつきかけて戻らぬ夫待つ間もとけし投島田結ふにいはれぬ身の上を誰にかつげの水櫛に髪の色艶すきかへしなよくしやんと結立てしは在所におしき姿なり母の齡も杖つきの野道とぼ〳〵立歸りヲヽ娘髪結やつたか美しうよふ出來たィヤもふ在所はどこもかも麥秋時分でいそがしい今も藪際で若い衆が麥かつ歌に親仁出て見やばゞんつれてと諷ふを聞き親父殿の遲いが氣にかゝり在口迄往たれどようなふ影もかたちも見へぬさいなこれやまあどふして遲い事じやわし一走り見て來やんしよイヤなふ若い

女の一人あるくはいらぬ事殊にそなたはちいさい時から在所をあるく事さへ嫌ひで鹽谷様へ御奉公にやつたれどゞふでも草深い所に縁が有るやら戻りやつたが勘平殿と二人居やればおとましい顔も出ぬヲヽかゝ様のそりや知れた事すいた男と添のぢやもの在所はおろか貧しいくらしでも苦にならぬやんがて盆に成つてとさま出て見やかんつかゝんつれてといふ歌の通り勘平殿とたつた二人踊見にいきやんしよ、お前も若い時覺があろとさし合いくらぬぐはら娘氣もわさ〳〵と見へにけろ。何ぼ其やうに面白おかしいやつても心の中はのィエ〳〵濟でござんすぬしのためにに祇園町へ勤奉公に行くは兼て覺悟の前なれど年寄つてとゝ様の世話やかしやんすがそりやいやんな小身物なれど兄も鹽谷の御家來なれば外の世話するやうにもないと親子咄しの中道傳ひ駕をかゝせて急ぎくるは祇園町の一文字やェ、こつと一家二家、ム爰じや〳〵と門口から與一兵衛殿内にかと言つゝはいれば是はまあ〳〵遠い所をソレ娘たばこ盆お茶上ましやと親子して槌でおいへを伯人やの亭主扨夕アハ是の親仁殿もいかい太儀、別條なふ戻られましたかェヽさては親父殿と連立つて來はなされませぬか是はしたりお前へいてから今においてヤア戻られぬかハテめんよふなハアヽもし稲荷前をぶら付て彼玉殿につまゝりやせぬかのコレ此中爰へ見に來て極た通りお娘の年も丸五年切給銀は金百兩さらりと手を打つた是の親仁がいはるゝには今夜中に渡さねばならぬ金有れば今晩證文を認め百兩の金子お借なされて下されと涙をこぼしての賴み故證文の上で半金渡し殘りは奉公人と引かへの契約何が其五拾兩渡すと悅んでいたゞきほた〳〵言ふて戻られたはもふ四ツでも有ふかい夜道を一人金持ていらぬ物と留ても聞かず戻られたが但しは道にィエ〳〵寄らしやる所はなふかゝ様ない共〳〵殊に一時も早ふそなたやわしに金

見せて悦ばさふ迎いきせき戻らしやる筈じやに合點がいかぬイヤコレ合點のいかぬはそつちのせんさくこちはさがりの金渡して奉公人連れていのと懐より金取出し後金の五十兩これで都合百兩サア渡す請とらしやれエ、お前それでも親仁殿の戻られぬ中はなふかるわがみはやられぬハテぐずぐ〳〵と埒の明かぬコレぐつ共すつ共言れぬ與一兵衛の印形證文が物いふじやて、コレ證文がけふから金で買切つたからだ一日違へばれこづゝ違ふどふで斯せざ濟まいと手を取つて引き立る、マア〳〵待てと取付く母親突退刎退無體に駕へ押込〳〵かき上る門の口鐵砲に簑笠打かけもどりかゝつて見る勘平つか〳〵と内に入り駕の内なは女房共こりやマアどこへヲヽ勘平殿よい所へよふ戻つて下さつたと母の悦び其意を得ずどふでも深い譯が有ろ母者人女房共様子聞かふとお上の眞中どつかとすはれば文字の亭主ヲヽ扨はこなたが奉公人の御亭主じやの、たとへ夫でも何んでも言號の夫などゝ脇より違亂妨げ申す者無之候と親仁の印形有るからはこちには構はぬ早ふ奉公人を受取ふヲヽ聟殿合點がいくまい兼てこなたに金の入る様子娘の咄しで聞た故どふぞ調へて進んぜたいといふた斗りで一錢の宛もなしそこで親父殿の言しやるにはひよつとこなたの氣に女房賣つて金調やうとよもや思ふてゞは有るまいけれどもし二親の手前を遠慮して居やしやるまい物でもないいつそ此與一兵衛が聟殿にしらさず娘を賣らふ、まさかの時は切り取りするも侍のならひ女房賣つても恥にはならぬお主の役に立つる金調へておましたらまんざら腹も立つまいと昨日から祇園町へ折り極はめにいて今に戻らしやれぬ故親子案じて居る中へ親方殿が見へて夕ア親父殿に半ん金渡し後金の五十兩と引がへに娘を連れて行ふと言てなれど親父殿にあふての上と譯をいふても聞き入れず今連れていなしやる所どふせふぞ勘平殿是は〳〵

先づ以つて舅殿の心遣ひ、忝いしたがこちにもちつとよい事が有れ共それは追つて親仁殿も戻られぬに女房共は渡されまい、とはなぜに、ハテいはゞ親なり判がゝり尤も夕ア半ん金の五十兩渡されたでも有ふけれどイヤこれ京大阪を股にかけ女護の島ほど奉公人を抱へる一文字屋渡さぬ金を渡したといふて濟物かいのまだ其うへに慥な事があるてや、これの親仁が彼五十兩と言ふ金を手ぬぐひにくるゝ〳〵とまいて懐にいれらるゝ、それやあぶない是に入れて首にかけさつしやれとおれがきて居る此一重物の縞のきれでこしらへた金財布借たればやんがて首にかけて戻られうヤア何んとこなたが着てゐる此縞のきれの金財布がヲ、てや。あの此縞じや何と慥な證據で有ふが。と聞くよりはつと勘平が肝先にひしとこたへそばあたりに目をくばり袂の財布見合はせば寸分違はぬ糸入縞、なむ三寶扨は夕ア鐵砲で打ち殺したは舅で有つたかハアはつと我胸板を二ツ玉で打ちぬかるゝよりせつなき思ひとはしらずして女房コレこちの人そは〳〵せずとやる物かやらぬ物か分別して下さんせヲ、成程ハテもふあの様に慥に言はるゝからはいきやらずば成まいがアノとつ様に逢ひでもかへ、イヤ親父殿にもけさちよつとあふたが戻りは知れまいコウそんなりやとつさんに逢ふてかへ夫れならそふといひもせでかゝ様にもわしもに案じさして斗りと言ふに文字も圖に乘つて七度尋ねて人うたがへじや親仁の有り所のしれたのでそつちもこつちも心がよいまだ此上にも四の五の有ればいや共にでんど沙汰まあ〳〵さらりと濟んでめでたいお袋も御亭主も六條參りしてちと寄らしやれサア〳〵駕に早うのりやアイ〳〵コレ勘平殿もふ今あつちへ行ぞへ。年寄つた二人の親達どふでこな様のみんな世話取わけてとつ様はきつい持病、氣を付けて下さんせと親の死目を露しらず願ふ便さいぢらしさ、いつそ打ち明け有り

早野勘平住家の段

切　豐竹故𩞁太夫
　　鶴澤清六

人形

與市兵衛女房娘おかる	吉田玉七
一文字屋才兵衛	吉田文五郎
早野勘平	吉田玉市
めつぽう彌八	吉田榮三
種ケ島の六	吉田兵次
狸の角兵衛	吉田多三郎
原郷右衛門	吉田瓢壽呂
千崎彌五郎	吉田小兵吉
	吉田文作

のまゝ咽さんにも他人有りと心を痛めこたへ居るヲヽ聟殿夫婦の別れ暇乞がしたかろけれどそなたに未練な氣も出ようと思ふての事で有ろイエ〳〵何ぼ別れても主のために身を賣れば悲しうも何共ないわしやいさんで行くかゝ様したがとゝ様に逢ずに行くのがヲヽそれも戻らしやつたらつい逢にいかしやろぞいの煩はぬ様に灸すへて息才な顏見せにきてたも鼻紙扇もなけれや不自山な何んにもよいか、とば付いてけが仕やんなと駕に乘まで心を付けさらばやさらば何の因果で人並な娘を持ち此悲しいめを見る事じやと齒をくひしばり泣きければ娘は駕にしがみ付き泣をしらさじ聞かさじと聲をも立てずむせかへる。なさけなくも駕かきあげ道をはやめて急ぎ行く。

勘平住家の段

母は後を見送り〳〵アヽよしない事いふて娘も嘸悲しかろヲヽこな人わいの親の身でさへ思ひ切りがよいに女房の事ぐず〳〵思ふて煩ふて下さんな此親父殿はまだ戻らしやれぬ事かいのふこなたあふたと言はしやつたのアヽ成程そりやまあどこらであはしやつて何所へ別れていかしやつた、されば別れた其所は鳥羽か伏見か淀竹田と口から出次第めつぽう彌八種が島の六、狸の角兵衛所の狩人三人連れ

親父の死骸に簑打ちきせて戸板にのせどや〳〵と内に入り、夜山仕舞で戻りがけ是の親父が殺されて居られた故狩人仲間が連れて來たと聞よりはつと驚く母、何者の仕業コレ聟殿殺したやつは何者じや敵を取てくだされのふコレ親父殿〳〵とよべどさけべど其かひも泣より外の事ぞなき狩人共口々にお袋悲しかろ代官所へ願ふて詮議してもらはしやれ笑止〳〵と打つれて皆は我家へ立歸る。母は涙の隙よりも勘平が傍へ差よつて、コレ聟殿よもや〳〵〳〵〳〵とは思へ共合點がいかぬ何んぼ以前が武士じやとて舅の死目見やしやつたら悔りも仕やるはづ、こなた道であふた時金受取はさつしやれぬか、親父殿がなんと言はれた、サアいはつしやれサア何とどうも返事は有るまいがのない證據はコレ爰にと勘平が懷へ手を指入れて引出すはさつきにちらりと見て置た此財布コレ血の付いて有るからはこなたが親父を殺したのイヤそれは〳〵とはエ、わごりよはなに隠しても隠されぬ天道樣が明らかな。親父殿を殺して取た其金にや誰にやる金ぢやム、聞へた。身貧な舅むすめ賣つた其金を中で半分くすねて置て皆やるまいかと思ふてコリヤ殺して取つたのじやな、今といふ今迄も律儀な人じやと思ふてだまされたが腹が立はいやいエ、爰な人でなし、あんまりあきれて涙さへ出ぬわいやいなふいとしや與一兵衛殿畜生のやうな聟とは知らずどふぞ元の侍に仕てやりたいと年寄て夜も寢ずに京三界をかけあるき家財を投打つて世話さしやつたも返つてこなたの身のあだと成つたるか飼かふ犬に手を喰るゝとよふも〳〵此やうにむごたらしう殺された事ぢや迄コリヤ爰な鬼よ蛇よとさまをかへせ親父殿を生けて戻せやいと遠慮會釋もあら男のたぶさをつかんで引寄〳〵たゝき付づた〳〵に切りさいなんだ迚是で何の腹が居よと恨の數々くどき立てかつぱとふして泣ゐたる身の誤りに勘平も五體に熱湯の汗を

流し疊にくひ付き天罰と思ひ知つたる折こそあれ、深編笠の侍二人早野勘平在宿をしめさるゝか、原郷右衛門千崎彌五郎御意得たしと音なへば折悪けれ共勘平は腰ふさぎ脇挾で出迎ひコレハ／＼御兩所共に見ぐるしき埴生へ御出忝しと頭をさぐれば郷右衛門見れば家内に取込みもありそふなイヤもふ些細な内證事、おかまいなく共いさ先あれへ、然らば左様に致さんとずつと通り座に付けば二人が前に兩手をつき此度殿の御大事にはづれたるは拙者が重々の誤り申ひらかん詞もなし、何卒某が科御ゆるしを蒙り亡君の御年忌諸家中諸共相勤る様に御兩所の御執成偏に頼み奉ると身をへりぐだり述ければ郷右衛門取りあへず先以て其方貯へなき浪人の身として多くの金子御石碑料に調進せられし段由良之助殿甚だ感じ入れしが石碑を營むは亡君の御菩提殿に不忠不義をせし其方の金子を以て御石碑料に用ひられんは御尊靈の御心にも叶ふまじと有つてなそれ金子は封のまゝ相戻さるゝと詞の中より彌五郎懐中より金子取出し勘平が前にさし置けばはつとばかりに氣も轉動母は涙ともろ共にコリヤ爰な悪人づら今といふ今親の罰思ひ知たか、皆様も聞て下され親父殿が年寄て後生の事は思はず聟の爲に娘を賣金調へて戻らしやるを待ちぶせして、あのやうに殺して取た金じや物天道様がなくばしらず何で御用に立つ物ぞ親殺しのいき盗人に罰を當て下されぬは神や佛も聞へぬあの不孝者お前方の手にかけてなぶり殺しにして下されわしや腹が立つわいのと身をなげふして泣き居たる聞くに驚き兩人刀追取つて弓手馬手につめかけ／＼彌五郎聲をあららげヤイ勘平非義非道の金取つて身の科の詫せよといはぬぞよ、わがやうな人非人武士の道は斗に入るまい親同然の舅を殺し金を盗だ重罪人は大身鑓の田樂ざし拙者が手料理ふるまはんとはつたとにらめば郷右衛門かつしても盗泉の水を飲ずとは義

者のいましめ舅を殺し取たる金亡君の御用金になるべきか生得汝が不忠不義の根性にて調へたる金と推察有つてつきもどされたる由良之助殿の眼力ほゝ天晴れ／＼さりながらハア情けなきは此事世上に流布有つて鹽谷判官の家來早野勘平非義非道を行ひしといはゞこりや汝斗りが恥ならず亡君の御恥辱としらざるかこな／＼／＼／＼うつけ者めなゝうぬ勘平これさ勘平おみやどうした者だ左程の事の辨なきなんじにてはなかりしがいかなる天魔が見入しとするどき眼に涙を浮め事を分け利をせむればたまり兼ねて勘平諸肌押脱脇指を抜くより早く腹へぐつとつきたてアゝいづれもの手前面目もなき仕合せ拙者が望み叶はぬ時は切腹と兼ての覺悟我舅を殺せし事亡君の御恥辱と有れば一通り申ひらかん兩人共に聞いてたべ、夜前彌五郎殿の御目にかゝり別れて歸るくらまぎれ山越猪に出合二ッ玉にて打ぬ留かけよつてさぐり見れば猪にはあらで旅人なむ三寶誤つたり藥はなきかと懷中をさがし見れば財布に入つたる此金道ならぬ事なれ共天より我に與ふる金と直に馳行彌五郎殿に彼金をわたし立歸つて樣子を聞ば打留たるは我舅金は女房を賣つた金、かほど迄する事なす事いすかのはし程違ふと言ふも武運に盡たる勘平が身の成り行き推量有れと血ばしる眼に無念の涙仔細を聞くより彌五郎ずんと立上り死骸引上打返しムウ／＼と疵口改め郷右衛門是見られよ鐵砲疵には似たれ共これは刀でえぐつた疵、ヱ、勘平早まりしと言ふに手負も見て悔り母も驚く斗なり、郷右衛門心付イヤコレ千崎殿ア、是にて思ひ當つたり、御自分も見られし通り是へ來る道端に鐵砲疵請けたる旅人の死骸立寄り見れば斧定九郎强慾な親九太夫さへ見限つて勘當したる惡黨者、身のイなき故に山賊すると聞いたるが疑ひもなく勘平が舅を討たはきやつが業ヱ、そんなりやあの親父殿を殺したは外の者でござりますかへハ

アはつと母は手負に縋り寄りコレ手を合して拜みます、年し寄の愚痴な心から恨みいふたは皆誤りこらへ下され勘平殿必ず死んで下さるなと泣詫れば顔ふり上只今母の疑ひも我惡名も晴れたれば是をめいどの思ひ出とし後より追付舅殿死手三途を伴はんと突込刀引廻せばアヽ暫く〳〵思はずも其方が舅の敵討つたるはいまだ武運に盡ざる所弓矢神の御惠にて一功立つたる勘平息の有る中郷右衛門が密に見する物有りと懷中より一卷を取出しさら〳〵と押しひらき此度亡君の敵高野師直を討取らんと神文を取かはし一味徒黨の連判かくのごとしと讀も終らず苦痛の勘平其姓名は誰々成るぞやヲヽ、徒黨の人數は四十五人汝が心底見屆けたれば其方を指加へ一味の義士四十六人是をめいどの土産にせよと懷中の矢立取出し姓名を書記し勘平これさ血判心得たりと腹十文字にかき切り臓腑をつかんでしつかと押へてサア血判つかまつる仕つたアヽのるな〳〵早野勘平重氏血判たしかに相濟んだぞエヽ忝や有難や我望みは達したり母人歎いて下さるな舅の最期も女房の奉公も反古にはならぬ此金一味徒黨の御用金といふに母も涙ながら財布と倶に二包二人が前に指出し勘平殿の魂の入つた此財布聟殿じやと思ふて敵討の御供につれてござつて下さりませ、ヲヽ、成程尤なりと郷右衛門金取り納め、思へば〳〵此金は縞の財布の紫摩黄金佛果を得よといひければアヽ佛果とはけがらはし死ぬ〳〵魂魄此土にとゞまつて敵討の御供するといふ聲も早や四苦八苦母は涙にかきくれながらナフ勘平殿此事を娘にしらしせめて死目にあはしてやりたいイヤ〳〵〳〵親の最期は格別勘平が死だ事必ず知らして下さるなお主の爲に賣つたる女房此事聞て不奉公せば主に不忠するも同然只其まゝにさし置かれよサア思ひ置く事なしと刀の切つ先き咽喉にぐつとさしつらぬきかつぱとふして息絶たりヤアもふ聟殿は死しやつたか扨も〳〵世の

祇園一力茶屋の段

由良之助　竹本相生太夫
重太郎　豐竹竹太夫
喜太八　竹本さの太夫
彌五郎　豐竹宮太夫
おかる　竹本伊達太夫
亭主　竹本隅若太夫
伴内　竹本相瀬太夫
九太夫　竹本播路太夫
平右衛門　竹本織太夫
鶴澤友衛門

中におれがやうな因果な者がまたと一人有らうか親父殿は死なしやる頼みに思ふ聟を先き立ていとし可愛の娘には生き別れ年寄た此母が一人残りて是がマアなんと生きて居られふぞコレ親父殿與一兵衛殿おれも一ツ所につれて往てくだされと、取付ては泣さけびまた立ちあがつてコレ聟殿母も倶にとすがり付てはふししづみあちらでは泣きこちらでは泣わつとばかりにどうと伏聲をばかりに歎しは目もあてられぬ次第なり、郷右衛門つゝ立ちあがりア、これ／＼老母なげかるゝはことはりなれども勘平が最後の様子大星殿にくはしく語り入用金手渡しせば満足あらん首にかけたる此金は聟と舅の七々日四十九日や五十兩あはせて百兩百ケ日の追善供養後ねんごろにとむらはれよ、さらばさらばおさらばと見送るなみだ見かへるなみだなみだの浪の立歸る人もはかなき。

祇園一力茶屋の段

花に遊ばゝ祇園邊りの色揃へ東方南方北方西方みだの浮土か塗りにぬり立てぴつかりぴか／＼光りかがやくはくや藝子にいかな粹めも現ぬかしてぐどんどろつどろつくやワイワイワイトサ、誰ぞ頼まふ亭主は居ぬか亭主／＼、是はいそがしいはどいつ様じやどなた様じやヨウ斧九太夫様御案内とはけ

人形

斧九太夫　桐竹紋太郎
鷺阪伴内　吉田玉徳
一力亭主　吉田玉次郎
矢間重太郎　桐竹門造
竹森喜太八　吉田文之助
千崎彌五郎　吉田文作
おかる　吉田文五郎
大星由良之助　吉田榮三
平岡平右衛門　吉田玉幸

うとい〳〵、イヤ初めてのお方を同道申たきつふ取込そふに見へるが一つ上げます座敷が有るか、ヤござります共〳〵今晩は彼由良大盡の御趣向で名有る色達を掴み込み下座敷はふさがつてござりますれどちゅら亭座敷が明いてござります、そりや又蜘蛛の巣だらけで有ふ、又悪口を、イヤサよい年をして女郎の蜘蛛の巣にかゝるまい用心、ソリヤきついは下には置かれぬ二階座敷ソレ灯を燈せ仲間共何んと伴内由良之助殿が體御らうじたか、九太夫殿ありやいつそ氣違でござる段々貴公より御内通有つてもあれ程にあろふとは主人師直は存ぜず拙者に罷登つて見とどけ心得ぬ事有らば早速知せよと申付ましたが扨〳〵我もへんしも折れましてござる併し悴力彌めは何んと致したな、こいつも折節此處へ参り倶に放埒指合いくらぬがふしぎの一つ今晩は底の底を捜し見んと心巧みを致して参つた密々にお咄し申さふイザ二階へ、先づ〳〵、然らば斯お出じつは心に思ひはせいであだなほれた〳〵の口先はいかいつやでは有るはいな、彌五郎殿喜多八殿是が由良之助殿の遊び茶屋一力と申のでござる、誰ぞちよと頼みたい、アイ〳〵どなた様じやへ、アイヤ我々は由良之助殿に用事有つて参つた奥へ往て言ふには矢間重太郎千崎彌五郎

竹森喜多八でござる此間より節に迎ひの人を遣はしますれどお歸りのない故三人連で參りましたちと御相談申さねば成らぬ儀がござる程にお逢なされて下されと吃度申ておくりやれ、夫は何ん共氣の毒でござんす由良樣は三日以來呑みつゞけお逢なされてからたわいは有るまい本性はないぞへ、ハテ扨てまあそふいふておくりやれアイ〳〵、彌五郎どのお聞きなされたか、承はつて驚き入りました初めの程は敵へ聞かする計略と存じましたがいかふ遊びに實が入り過ぎまして合點が參らぬ、何んと此喜多八が申た通り魂が入れ替つてござらふがのいつそ一間へ踏込、イヤ〳〵得と面談致した上、成程然らば是に相待ちませふ、折に二階へ勘平が妻のお輕はゑいざまし早里馴れて吹風にうさを晴して居る所へ、ちよといてくるぞや由良之助ともあろ侍が大事の刀を忘れて置たつい取つてくる其間に掛けものもかけ直し爐の炭もついで置きやア、ソレ〳〵〳〵こちらの三味線ふみおるまいぞ是はしたり九太はもう逝れたそふな父よ母よと泣聲聞けば妻にあふむのうつせし言の葉ヱ、何んぢやいな置しやんせ、傍り見廻はし由良之助釣燈籠の明りを照し讀長文は御臺より敵の樣子こまゞ〳〵と女の文の後や先きう〳〵ではかとらず、餘所の戀よと羨ましくおかるは上より見おろせど夜目遠目成り字性もおぼろ思ひついたるのべ鏡出して寫して讀取る文章、下家よりは九太夫がくりおろす文月かげにすかし讀とは、神ならずほどけかゝりしお輕がかんざしばつたり落れば、下にはゝつと見上げて後へ隱す文、椽の下には猶ゑつぼ、上には鏡の影隱し由良樣か、おかるかそもぢはそこと何してぞ、私しやお前にもりづぶされ餘りつらさに醉ざまし風に吹かれて居るわいナ、ムンハテなふワリャよふ風に吹れてじやのイヤかるそもぢにちと咄したい事がある屋根越の天の川でこゝからは言はぬちよつと

おりてたもらぬか、咄したいとは頼みたい事かへ、マアそんな物、廻つてきやんしよ、イヤノ〳〵段梯子へおりたらば仲居が見付けて酒にせうア、どふせふなム、幸ひ爰に九ツ梯子是ほふまへておりてたもと小屋根に架ければ、此梯子は勝手がちがふてヲヽこはどふやら是はあぶない物大事ない〳〵あぶないこはいは昔の事三間づゝまたげても赤がうやくもいらぬ年ばへ、あほう言はんすな船に乘つた様でこはいはいな、道理で船玉様が見へるは、ヲ、覗かんすないナ、洞庭の秋の月様を拜み奉るじや、イヤモウそんならおりやせぬぞへ、おりざおろしてやろ、アレ又悪い事を、やかましい〳〵生娘が何ぞの様に逆縁ながらと後よりづつとだきしめ抱おろし何とそもじは御らうじたか、アイいゝえ、見たで有〳〵、何じややら面白そうな文、アの上から皆よんだか、ヲヽくど、アヽ身の上の大事こそは成りにけり何んの事ぢやぞいな、何の事とはおかる古いがほれた女房になつてたもらぬか、おかんせ嘘ぢや、サア嘘から出た誠でなければ根がとげぬおふと云や〳〵、イヤいふまい、ソリヤなぜ、サアお前のは嘘から出て誠ぢやない誠から出た皆うそ、おかる、アイ、うけ出そふ、エヽ、嘘でない證據に今宵の内に身請せふ、ムンイヤわしには、間夫があるならそはしてやろ、そりやマアほんとかへ侍冥利三日成り共閨ふたら夫れからは勝手次第、ハア嬉しうござんすと言はして置いて笑をでの、イヤ直ぐに亭主に金渡し今の間に埒さそふ氣遣ひせずと待つて居や、そんなら必づ待つて居るぞへ、金渡してくる間どつちへも行きやるな女房じやぞ、夫もたつた三日、それ合點、エ、忝ふござんす、世にも因果な者ならわしが身でや可愛い男にいくせの思ひエ、何じやいな置しやんせ、ア、遊は花の都の祇園町賑しい事だなア、何んとやらいつたはい入り相の鐘は廓の夜明かなとはよくいつたはハ、

、、、ャそれはそうと妹かるが此廓へ勤め奉公致しておると聞たがどふぞ逢いたい物だがョ、幸ひの女中これちよと物を尋ねたいが山崎へんから此廓へ勤め奉公に來て居るかると言ふ女御存じないか知つて居ればどうぞ教へてくれまへかな、今ま手のはなせぬ事仕て居る程に勝手もとで聞て下さんせ、サアそふは思つたが勝手元も何だかごで〳〵といそがしいどうぞ教へてくれろコレ女中、エ、しらぬはいな、そふすずなく言はずとゝふぞ教へてくれろコレ女中〳〵〳〵ヤアわりや妹かるでねへか、ヤア兄様恥かしい所で逢ひました・顔を隠せば、ア、苦しうない〳〵關東よりのもどりがけ母人に逢て委しく聞た夫のためお主の爲よく實れた出かした〳〵なアそう思ふて下さんすりやわしや嬉しいシタガマア悦んで下さんせ思ひがけなふ今宵請出さるゝ筈、夫は重疊シテ何人のお世話で、サアお前も御存じの大星由良之助様のお世話で、何んだ由良之助殿に請出されるそれは下地からの馴染か、何のいな此中より二三度酒の相手夫が有らば添はしてやろ暇がほしくば暇やろと結構過た身請け、ムゝ扨ては其方を早野勘平が女房と、イゝエしらずじやぞへ親夫のはぢなれば明かして何の言いませふムンスリャ本心放埒者お主のあだを報ずる所存はないに極つたな、イェ〳〵コレ兄様有るぞへ〳〵、有るとは何が、高ふは言はれぬコレ斯々と囁けば、ムゝゝゝあ、ムンスリャ其文慥に見たか、アイ殘らず讀んだ其後で互ひに見合はす顏と顏それからじやら付き出してつい身請けの相談、アノ其文殘らず讀だ後で、アイナ、ヤ夫で聞へた妹迚も遁れぬそちが命身共にくれよと拔き打ちにばつしと切れば、ちやつと飛退コレ兄様わしには何誤り勘平と言ふ夫も有りきつと二親あるからはこな様のまゝにも成るまい受出されて親夫にあはふと思ふがわしや樂しみ、どんな事でもあやまらふ赦して下さんせ

道行戀の初旅

竹本錣太夫
豐竹呂太夫
豐竹辰太夫
竹本さの太夫
豐竹松島太夫
豐澤新左衛門
鶴澤寛治郎
野澤吉左
豐澤新太郎
野澤吉季
鶴澤友三郎
鶴澤清友
鶴澤一郎右衛門

赦してと手を合はすれば平右衛門抜き身を捨てゝ可哀や、妹わりや何にも知らねえな親與一兵衛殿は六月廿九日の夜人に切られてお果なされたはやい、ヤアそれはまあ、ア、コリヤ／／／／まだ悔りすな、まだ／／後に悔りの親玉があるわい、われが請出されて添ふと思ふ勘平はな、兄様勘平殿は、サア勘平はな、よい女房様でも出來たのかへ、エ、そんな陽氣な事じやないはい、そんなら勘平様は、サア其勘平は勘平でやつぱり勘平だわい、エ、コレ兄様勘平様はどふさしやんしたぞいな、ムサア其勘平は腹を切つて死だはやい、エ、、、、ウンヲ、、道理だ／／様子咄せばワアコリヤ大へんだ妹が目をまはしたアン誰か居ねへか女郎が目をまはした仲居衆／／エ、誰も居ねへ待て／／ヲ、幸ひの手水鉢今水をくれるぞ待／／／／ソラ水だ、おかるやい／／、ア、、、、、コリアどふだ氣が付いたか／／ヨしつかりしろ／／、ヲ、兄様、ヲ、兄だ／／ソラ平右衛門だ、ヲ、兄さん勘平様はへ、チエ、情けねえまだ尋ぬろかい。其勘平は友朋輩の面晴に腹を切つて死んだはいやい、ヤア／／／／それはマアほんとかいの。コレなふ／／と取り付いてコレ兄様どうせふぞいな、ヲ、道理だ、どふせふぞいなア、ヲ、尤だ、どふせふぞ

いなア〳〵〳〵〳〵、ヲ、道理だ〳〵〳〵〳〵はいやい様子咄せば長い事お勞はしいは母者人言ひ出しては泣き思ひ出しては泣娘かるに聞かしたら泣き死にするで有ろ必ずいふてくれなとのお頼み言ふまいとは思へ共迎も遁れぬそちが命其譯は忠義一途に凝かたまつた由良之助殿勘平が女房と知らねば受出す義理もなし元來色には猶ふけらず見られた狀が一大事請け出して差殺す思案の底と慥に見へたよしそふなふても壁に耳外より洩ても其方が科密書を覗き見たるが誤りころさにやならぬ此場の仕儀人手にかけふより我手にかけ大事を知つたる女妹とて赦されずとそれを功に連判の數に入つてお供に立ん小心者の悲しさは人に優れた心底を見せねば數には入られぬ聞き譯て命をくれ死でくれ妹と事を分けたる兄の詞、おかるは始終せき上〳〵便りのないは身の代を役に立ての旅立か暇乞にも見へそな物と恨んで斗りおりました勿體ないがとゝ様は非業の死でもお年の上勘平殿は三十に成るやならずに死ぬるのは嘸悲しかろ口惜かろ逢たかつたであろふのになぜ逢はせては下さんせぬ親夫の精進さへ知らぬはわたしが身の因果何の生きておりませうお手にかゝらば、かゝさんがお前をお恨みなされませう自害した其後で首なりと死骸なりと功に立つなら功にさんせさらばでござんす兄様と言いつゝ刀取り上ぐる、ヤレ待て暫しと止どむる人は由良之助、ハツと驚く平左衛門、お輕は放して殺してと、あせるを押さへて ホ、ウ兄妹共心底見えた兄は東の供を赦す妹はながらへて未來への、追善サア其追善は冥途の供と、もぎ取る刀をしつかと持添へ夫勘平連判には加へしかど敵一人も敵取らず未來で主君に言ひ譯有るまじ其言譯はコリヤ爰にとぐつと突込疊の透間、下には九太夫肩先ぬはれて七轉八倒、ソレ平右衛門くらひ醉た其客に加茂川でナ、いかゞ斗ひましよ、水ざうすいをくらはせい、

人形

妻戸無瀬　吉田文五郎

娘小浪　桐竹紋十郎

ハ、ア、イケ、してこいなア。

道行戀の初旅

浮世とは、誰が云初めて飛鳥川、ふちも知行も瀬と代り、寄邊も浪の下人に、結ぶ鹽冶の誤は、戀の枷杭加古川の、娘小浪が云號、結納もとらず其儘に、振捨られし物思ひ、母の思ひは山科の、聟の力彌をちからにて、住家へ押て嫁入も、世に有なしの義理遠慮妬つれず乘物も、廢て親子の一人連、都の空に心ざす、雪の肌も寒空は、寒紅梅の色添て、手先覺へず凍へ坂、薩埵峠にさしかゝり、見返れば不二の煙の空に消、行方も知れぬ思ひをば、晴す嫁入の門火ぞといはふて三保の松原に、つゞく並松街道を、狹しと打たる行列は、誰としらねど浦山し、ア、世が世ならあのごとく、一度の晴と花かざり、仆達をするがの府中過、城下過れば氣散じに、母の心もいそ〳〵と、二世の盃濟で後、閨の睦言私言、親知らず子知らずと、蔦の細道縺れ合、嬉しからうと手を引けば、アノ母様の差合を脇へこかして鞠子川、うつの山邊の現にも、殿後初の新枕、せとの染飯强いやら、恥かしいやら嬉しいやら、案じて胸も大井川、水の流と人心、若や心はからぬか、日蔭に花は咲ぬかと、いふて島田の憂晴し、我身の上を斯とだに、人しらすかの

橋越て、行ば吉田や赤坂の、招く女の聲揃へ、縁を結ばば、清水寺へ參らんせ、音羽の瀧にざんぶりざ、毎日さういふて拜まんせ、そうじやいな、ししきがんかうがかいれいにうきう、神樂太鼓にヨイコノエイ、こちの君樣を覺さまされた、都殿御に逢ふてつらさが語りたや〳〵、ソウトモ〳〵、若も女夫とかか樣ならば、伊勢さんの引合せ、鄙俗歌も身にとつて、好い吉左右になる海潟、熱田の社あれかとよ、七里の渡し帆を上げて、艫拍子揃へヤッシッシ、舵取音は鈴虫か、いや蟋蟀鳴や霜夜と詠たるは、小夜更てこそくれ迄と、限り有船急がんと、母が走れば娘も走り、空の霰に笠覇ひ、船路の友の跡や先、庄野龜山せきとむる、伊勢と吾妻の別れ道、驛路の鈴の鈴鹿越間の土山雨が降、水口の葉に云囃す、石部石場で大石や、小石拾ふて我妻と、撫つ擦りつ手に据て、頓て大津や三井寺の、麓を越て山科へ、程なき里へ、急ぎ行く。

山科閑居の段

風雅でもなくしやれでなく、しやう事なしの山科に山良之助の佗住居祇園の茶やにきのふから雪の夜明し朝戻り、幇間仲居に送られて、酒がほたへる雪こかし、雪はこけいで雪こかされ、仁體捨し遊びなり、旦那中旦那、お座敷の景ようござります、お庭の藪に雪持てトなつた所、とんと繪に書た通り、けふといじやないかいのふお品、サア此景を見て外へどつちへもいきたうはござりますまいがナ、ヘッ朝夕に見ればこそあれ住吉の、岸に向ひの淡路島山と云ふ事しらぬか、自慢の庭でも内の酒は呑めぬ〳〵、エ、通らぬやい〳〵、サア〳〵奥へ〳〵、奥はどこにぞお客があると、先に立て飛石の詞もしどろ足下も、しどろに見ゆる酒機嫌、お戻そうなと女房の、お石は輕う汲で出る、茶やの茶よりも氣の花香、お寒からうと悋氣せぬ詞のしほ茶醉醒し、一口

山科閑居の段

中　竹本長尾太夫
　　野澤吉左
切　竹本津太夫
　　鶴澤綱造

呑で跡打明け、ア、奥無粋なぞや無粋なぞや、折角面白ふ醉た酒、醒せとは、ア、〳〵降たる雪かな、いかに餘所のわろ達が嘸悋氣とや見玉ふらん、夫雪は打綿に似て飛で中入と成、奥は母さまと云へばとつと世帶じむと云へり、加賀の二布へお見舞の、遲いは御用捨、伊勢海老と、盃穴の稲荷の玉垣は、朱ふなければ信がさめると云ふ樣な者かい、ヲ、是〳〵〳〵こぶら返りじや足の大指折た折た、をつとよし〳〵、序にかうじやと足先で、ア、是ほたへさしやんすな嗜ましやんせ、酒が過るとたはいがない、ほんに世話でござらうのと物やはらかにあいしらふ、力彌心得奥より立出、申々母人父樣は御寢なつたか是上げられいとさし出す、親子が所作は塗分ても、下地は同じ桐枕、ヲ、應は夢うつつ、イヤもう皆いにやれ、ハイ〳〵ハイそんならば旦那へ宜しう、若旦那ちと御出を目遣で、去際わるう歸りける、聲聞へる迄行過させ、由良之助枕を上、ヤア力彌遊興に事よせ丸めた此雪、所存有ての事もやが何と心得たぞ、ハッ雪と申物は降る時には少しの風にも散、輕い身でござりませう共、あの如く一致して丸まつた時は、嶺の吹雪に岩をも碎く大石同然、重きは忠義、其重い忠義を思ひ丸めた雪も、餘日數を延過してはと思召て

人形

妻戸無瀬	吉田文五郎
娘小浪	桐竹紋十郎
下女りん	桐竹紋司
妻お石	桐竹政龜
加古川本藏	吉田玉藏
大星由良之助	吉田榮三
大星力彌	吉田榮三郎

のイヤ〳〵山良之助親子、原郷右衛門等四十七人連判の人數は十、皆主なしの日かげ者、かげにさへ置ば解ぬ雪、せく事はないと云事、爰は日當り、奥の小庭へ入て置、螢を集め雪を積も學者の心長き例、女共、切戸内から明てやりやれ堺への狀認ん、飛脚が來らばしらせいよ、アイ〳〵開ひの切戸の内、雪こかし込戸を立る、襖引立入りける、人の心の奥深き、山科の隱家を、訪ねて爰に來る人は、加古川本藏行國が女房となせ、道の案内の乘物を、傍に待せ只一人、刀脇差さすがけに、行儀亂さず屁の戸口、頼みませう〳〵と云ふ聲に、襖外して飛んで出る、昔の奏者今のりん、どうれと云ふもつかうど成る、ハツ大星由良之助様お宅は是かな、左様ならば加古川本藏が女房となせでござります、誠に其後に打絶ました、些とお目に懸りたい様子に付、遙々參りましたと、傳へられて下されと、云入れさせて表の方、乘物是へと早寄させ、娘爰へと呼出せば、谷の戸明けて驚の、梅見付たる微笑顔、眉深に被たる帽子の内、アノ力彌様のお屋敷は最う爰かへ、わしや恥かしいと艶かし、取散す物片付けて、先づお通りなされませと、下女が傳へる口上に、駕籠の者皆歸れ、御案内頼ますと、云ふもいそ〳〵娘の小浪、母に附添ひ座に

直れば、お石しとやかに出迎へ、是は〳〵お二方共ようそや御出、疾よりお目にも懸る筈、お聞及の今の身の上、お尋ねに預りお恥かしい、アノ改まつたお詞、お目に懸るは今日始なれど、先達て御子息力彌殿に、娘小浪を許嫁致したからは、お前なり私なり、如同士、御遠慮に及ばぬこと、是は〳〵痛入る御挨拶、殊に御用繁い本藏様の奥方、寒空といひ思懸無い御上京、となせ様はともあれ、小浪御寮嘸都珍らしからう、祇園清水智恩院、大佛様御覽じたか、金閣寺拜見あらば、好い傳手が有るぞへと、心置無き挨拶に、唯アイ〳〵も口の内帽子眩き風情なり、となせは行儀改めて、今日參る事餘の儀にあらず、是なる娘小浪、許嫁致して後、御主人鹽谷殿不慮の儀に付、由良之助様力彌殿、御在所も定かならず、移變るは世の例、變らぬは親心、兎や角と聲合せ、此山科に御座る由、承はりました故、此方にも時分の娘、早うお渡し申したさ、近頃押付がましいが、夫も參る筈なれど、出仕に暇の無い身の上、此二腰は夫が魂、是を帶せば卽ち夫本藏が名代と、私が役の二人前、由良之助様にも御意得まし、祝言させて落着たい、幸今日は日柄も好し、御用意なされて下さりませと相述ぶる、是は思も寄らぬ仰、折惡う夫由良之助は他行、去年ら若宿に居りまして、お目に懸り申さうならば、御親切の段千萬忝う存じまする、許嫁致した時は、故殿様の御恩に預り、御知行頂戴罷在る故、本藏様の娘御を、貰ひませう然らば呉れうと云ひ約束は申したれども、只今は浪人、人遣迎もござらぬ内へ、如何に約束なれば迎、大身な加古川殿の御息女、世話に申す提燈に釣鐘、釣合はぬは不緣の本、ハテ結納を遣はしたと申すでは無し、どれへなりと外々へ、御遠慮無う遣されませと、申さるゝでござりませうと、聞いてはッとは思ひ乍ら、アノまあお石様の仰しやる事、如何に卑下なされうとて、本藏と由

良之助様、身上が釣合はぬとな、其ならば申しませう、手前の主人は小身故、家老を勤むる本藏は五百石、鹽谷殿は大名、御家老の由良之助様は千五百石、スリヤ本藏が知行とは、千石違ふに合點で、許嫁はなされぬか、只今は御浪人、本藏が知行とは皆違ふてから五百石、イヤ其お詞違まする、五百石は扨置き、一萬石違ふても、心と心が釣合へば、大身の娘でも嫁に取るまいもので無い、ム、こりや聞所お石様、心と心が釣合はぬと仰しやるは、何の心じやサア聞かう、主人鹽谷判官様の御生害、御短慮とは云乍ら、正直を本とするお心より起りし事、夫に引換へ師直に、金銀を以て媚詔ふ、追從武士の錄を取る本藏どのと、二君に仕へぬ由良之助が大切の子に、釣合はぬ女房は持たされぬと、聞も敢へず膝立直し詔ひ武士とは誰が事、様子に依つて聞捨られぬ、其處を赦すが娘の可愛さ、夫に負けるが女房の常、祝言有らうが有るまいが、許嫁あるからは天下晴れての力彌が女房、ム、面白い、女房ならば夫が去る、力彌に代つて此母が、去つた〳〵と云放し、心隔の唐紙を、礑と引閉て入にける。娘はわつと泣出し、折角思ひ思はれて、許嫁した力彌様に逢せて遣るとのお詞を便に思ふて來たものを、姑御の胴慾に去られる覺私や無い、母様何卒詑言して、祝言させて下さりませと、縋り歎けば母親は、娘の慾目か知らねども、ほん〳〵、親の慾目か知らねども、ほんに和女の綺量なら、十人並にも優つた娘、好い聟をがなと詮議して、許嫁した力彌殿、尋ねて來た効も無う、聟に知らず去つたとは、義理にも云れぬお石殿、姑去は心得ぬ、ム、扨は浪人の身の寄邊なう、筋目を云立て、有德な町人の聟になつて、義理も法も忘れたな、喃小浪、今云ふ通りの男の性根、去つたと云ふを面當、欲しがる所は山々、外へ嫁入する氣は無いか、コレ大事の所泣かずとも確と返事しや、コレ何うじや何うじ

やと、尋ぬる親の氣は張弓、アノ母様の胴慾な事仰しやります、國を出る折父様の仰しやつたは、浪人しても大星力彌、行儀と云ひ器量といひ、仕合せな聟を取つた貞女兩婦に見えず、假令夫に別れても、又の夫を設けなよ、主有る女の不義同然、必ず〳〵寢覺にも、殿御大事を忘るゝな、申良之助殿夫婦の衆へ、孝行盡し夫婦中睦じいとてあじやらにも、悋氣ばしして去るゝな、案ぜうか迚隱さずと、懷胎になつたら早速に、報せて呉れと仰しやつたを、わたしやよう覺えて居る、去れて住んで父様に、苦に苦を懸けて何う云ふて、何う言譯が有らうとも、力彌様より他に餘の殿御、わしや厭々と一筋に、纏を立拔く心根を、聞くに耐兼ね母親の、涙一圖に突詰めし、覺悟の刀拔放せば、母様是は何事と、押留られて顏を上げ、何事とは曲が無い、今も和女の云ふ通り、一時も早う祝言させ、初孫の顏見たいと、娘に甘いは父の例、悅んでござる中へ、まだ祝言もせぬ先に、去れて戻りました迚、何う連れて去れうぞ、と云ふて先で合點せにや、爲様もやうも無いわいの、殊に和女は先妻の子、私とは成さぬ中じや故、およそにしたかと思はれては、何も生ては居られぬ義理、此通りを死だ跡で、父御へ言譯してたもや、ア、勿體ない事仰しやります。殿御に嫌はれ私こそ死べき筈、生きてお世話に成る上に、苦を見せますは不孝者母様の手に掛けて、私を殺して下さりませ、去れても殿御の家、爰で死ぬれば本望じや、早う殺して下さりませ、チツチよう云やつた、出來しやつた、和女許り殺しはせぬ、此母も三途の倶、和女を俺が手に掛けて、母も追付跡から行く、覺悟は宜いかと立派にも、涙止めて立掛り、コレ小浪アレあれを聞きや、表に虛無僧の尺八鶴の巢籠、鳥類でさへ子を想ふに科も無い子を手に掛けるは、因果の寄合と、思へば足も立兼ねて、顚ふ拳をやう〳〵に、振上ぐる刄の下、尋常に座を占め

手を合せ、南無阿彌陀佛と、唱ふる内より御無用と、聲掛られて思はずも、弛みし拳尺八も、倶にひつそりと鎭まりしが、ヲ、爾じや、御無用と留めたは、虚無僧の尺八よな、助けたいが山々で、無用と云ふに氣後し、未練なと笑れな、娘覺悟は可いかやと、又振上ぐる又吹出す、とたんの拍子に又御無用、ム、又御無用と留めたは修業者の手の中か、振上げた手の中か、イヤお刀の手の中御無用、悴力彌に祝言させう、エ、爾う云ふ聲はお石様、其りや眞實か誠か、と、尋ぬる襖の内よりも、あひに相生の、松こそ目出たかりけれと、祝儀の小謠素木の小四ほう、目八分に携出で、義理ある中の一人娘、殺さうと迄思詰めたとなせ様の心底、小浪殿の貞女、志がいとをしさ、させ悪い祝言さす、其代り世の常ならぬ嫁の盃、受取るは此三寶、御用意有らばと差置けば、少しは心休まりて、拔いたる刀鞘に納め、世の常ならぬ盃とは、引出物の御所望ならん、此二脇は夫が重代、刀は正宗、差添は浪の平行安、家にも身にも替へぬ軍寶、是を引出と皆まで云さず、浪人と侮つて價の高い二腰、まさかの時は賣拂へと、云ぬ斗りの袈引出、御所望申すは是では無い、ム、爾なら何が御所望ぞ、此三寶へは加古川本藏殿のお首を載せて貰ひたい、エ、其りや又何故な、御主人鹽谷判官様、高野師直にお恨有つて、鎌倉殿で一刀に斬付給ふ、其時此方の夫加古川本藏、其座に在つて抱留め、殿を支へたばつかりに、御本望も遂られず、敵はやう〳〵薄傷ばかり、殿はやみ〳〵御切腹、口へこそ出し給はね、其時の御無念は、本藏殿に憎悪が懸るまいか、サ有るまいか、家來の身として其加古川が娘、安閑と女房に持つやうな、力彌じやと思ふての祝言ならば、此三寶へ本藏殿の白髮首、否と有らば何方でも、首を並ぶる尉と姥、それ見た上で盃、させう、サ、サ、否か、應かの返答をと、鋭き詞の理屈詰、親子は

はつと差俯き、途方に暮れし折柄に、加古川本藏が首進上申す、お受取なされよと、表に控へし虚無僧の、笠拔捨てゝしづ〳〵と内へ入るは、ヤーお前は父様、本藏殿、爰へは何うして此形は、合點が往かぬこりや何うじやと、咎むる女房、ヤアざわ〳〵と見苦しい、始終の仔細皆聞いた、其方達に知さず爰へ來た、様子は追つて先づ默れ、其許が由良之助殿御内しやうお石よな、今日の仕儀恁有らんと思ひ、妻子にも知せず様子を窺ふ加古川本藏、案に違はず拙者の首、鞏弓出に欲しいとな、ハハ、ゝ、ゝいやはやそりや侍のいふ事、主人の怨を報はんといふ所存もなく、遊興に耽り、大酒に性根を亂し、放埒なる身持、日本一の阿房の鏡、蛙の子は蛙に成、親に劣らぬ力彌めが大白痴、狼狽武士のなまくら鋼、此本藏が首は切ぬ、馬鹿盡すなと踏碎く、破三方のふち放れ、此方から鞏に取ぬ、ちよこざいな女めと、云せも果ず、ヤア過言なぞ本藏殿、浪人の錆刀、切れるか切れぬか鹽梅見せう、不祥ながら由良之助が女房、望む相手じや、サア勝負々々々と裾引上、長押に懸たる鑓追取、突かゝらんず其景色、是は短氣なマア待てと、止め隔つる女房娘、邪魔ひろぐなとあらけなく、右と左へ引退る、間も有せず突かくる、鑓のしは首引搦、捩つて拂へば身を背け、諸足縫んと閃かす、刄棟を蹴つて蹴上ぐれば、拳放れて取落す、鑓奪はれじと走寄、腰際帶際引搦、どうと打付動かせず、膝に引敷強氣の本藏、敷れてお石が無念の切齒、親子ははあ〳〵危む中へ、驅出る大星力彌、捨たる鑓を取る手も見せず、本藏が馬手の肋、弓手へ通れと突進す、うんと計にかつぱと伏す、コハ情なやと母娘、取付歎くに目を懸ず、止め刺んと取直す、ヤア待て、力彌早まるなと、鑓引留て由良之助、手負に向ひ、一別以來珍らしや本藏殿、御計略の念願屆き、鞏力彌が手に懸つて、嘸本望でござらうのと、星を指たる

大星が、詞に本藏目見開き、主人の欝憤を晴さんと此程の心遣ひ、遊所の出合に氣を緩ませ、徒黨の人數は揃ひつらんと、思へば貴殿の身の上は、本藏が身に有べき筈、常春鶴ケ岡造營の砌、主人桃井若狹助、高師直に恥しめられ、以ての外憤り某を密に召れ、まづかう〳〵の物語、明日御殿にて出喰せ、一刀に討留ると、思詰たる御眼色、留ても留らぬ若氣の短慮、小身故に師直に、賄賂薄きを根に以て、恥しめたると知たる故、主人に知らせず不相應の、金銀衣服臺の物、師直へ持參して心に染ぬ詔ひも、主人を大事と存るから、賄賂課せ彼方から誤つて出た故に切に切れぬ拍子抜、主人が恨もさらりと晴、相手代つて鹽谷殿の、難儀と成たは則其日、相手死なずば切腹にも及ぶまじと、抱留たは思ひ過した、本藏が一生の誤りは、娘が難儀としらがの此首、聟殿に進ぜたさ、女房娘を先へ登し、媚詔ひしを身の科に、お暇を願ふてな、道を替てそち達より二日前に京着、若い折の遊藝が益に立つた四日の内、こなたの所存を見拔た本藏、手に懸れば恨を晴し約束の通此娘、力彌に添はせて下さらば、末來永劫御恩は忘れぬ、コレ手を合して賴入、忠義にならでは捨ぬ命、子故に捨る親心、推量有れ由良殿、といふも涙に咽返れば、妻や娘は有にもあられず、實は斯とは露しらず、死におくれた計に、お命捨るはあんまりな、冥加の程が恐ろしい、赦して下されと、かつぱと伏して泣叫ぶ。親子が心想像、大星親子三人も、俱に萎れて居たりしが、ヤア〳〵本藏殿、君子は其罪を惡んで其人を惡まずといへば、緣は緣、恨は恨と、格別の沙汰も有べきにと、嘸恨に思はれんか、所詮此世を去る人、底意を明けて見せ申さんと、未前を察して奥庭の、障子さらりと引明れば、雪を束て石塔の、五輪の形を二つまで、造建しは大星が成行果を顯せり、となせは賢しく、ム、御主人の怨を討て後、二

君に仕へず消ゆるといふお心のあの雪、力彌殿も其心で、娘を去つたの胴慾は、御不便餘つてお石様、恨んだがわしや悲しい、となせ様のおつしやる事、玉椿の八千代まで共祝はれず、後家に成嫁取た、此様な目出度悲しい事はない、斯云事がいやさに、酷難面いうたのが、無憎かつたでござんしよなう、イ、エイナ、わたしこそ腹立まゝ、町人の聟に成て、義理も法も忘れたかと、いふたのが恥かしいやら悲しいやら、どうも顔が上られぬお石様、となせ様、氏も器量も勝れた子、何として此様に果報拙い生れやと、聲も涙に咳上る、本藏熱き涙を押へ、ハツアア嬉しや本望や、呉王を諫て誅せられ、辱を笑ひし呉子胥が忠義取に足らず、忠臣の鏡とは唐土の豫讓、日本の大星、昔より今に至る迄、唐と日本にたつた二人、其一人を親に持、力彌が妻に成たるは、女御更衣に供るより、百倍勝つてそちが身は、武士の娘の手柄者、手柄な娘が聟殿へ、お引の目錄進上と懷中より取出すを、力彌取て押戴き、披見ればコハいかに、目錄ならぬ師直が屋敷の案内一々に、玄關長屋付部屋水門物置柴部屋まで、繪圖に委しく書付たり、由良之助ほつと押戴き、ヘツエ有難し〳〵、徒黨の人數は揃へども、敵地の案内知れざる故、發足も延引せり、此繪圖こそは孫呉が秘書、我爲の六韜三略、兼て夜討と定たれば、繼梯子にて塀を越し、忍び入には、緣側の、雨戸外せば直に居間、爰を仕切て斯攻てと、親子が悦び、手負ながらもぬからぬ本藏、イヤ〳〵夫は僻言ならん、用心嚴しき高師直、障子襖は皆尻ざし、雨戸に合栓合樞、抉ては外れず大槌にて、毀たば音して用意せんかそれいかゞ、ヲ、夫にこそ術あれ、凝ては思案に能はずと、遊所よりの歸るさ、思ひ寄たる前栽の雪持竹、雨戸をはづす我が工夫、仕様を爰にて見せ申さんと、庭に折しも雪深く、さしもに强き大竹も雪の重さに、ひいはりとしはりし竹を、引

兩國橋引揚の段

豐竹辰太夫
竹本さの太夫
豐竹宮太夫
竹本隅若太夫
竹本相瀬太夫
豐澤團伊三

人形

大星由良之助　吉田榮三
大星力彌　吉田榮三郎
原郷右衞門　吉田小兵吉
千崎彌五郎　吉田文作
竹森喜太八　吉田文之助
矢間重太郎　桐竹門造
大高源吾　桐竹紋太郎
諸士　大ぜい

廻して鴨居に嵌、雪に撓む弓同然、此如く弓を拵へ弦を張、鴨居と敷居に嵌置て、一度に切て放時は、まづ此様にと積つたる枝打拂ば雪散て、伸るは直なる竹の力、鴨居撓んで溝はづき、障子殘らずばた〳〵〳〵、本藏苦しさ打忘れ、ハ、アしたり〳〵、計略といひ義心と云ひ、個程の家來を持ながら、了簡もあるべきに、淺き工みの鹽谷殿、口惜き擧動やと、悔を聞く に御主人の御短慮なる御仕業、今の忠義を戰場のお馬先にて盡さばと、思へば無念に閉塞がる、胸は七重の門の戸を、洩るは涙計りなり、力彌は徐々下立て、父の前へ手をつかへ、本藏殿の寸志により敵地の案内知つたる上は、泉州堺の天河屋儀平方へも通達し、荷物の工面仕らんと、聞も敢ず何さ〳〵、山科に有事隱れなき由良之助、人數集めは人目有、一先堺へ下つて後、あれから直に發足せん其方は母嫁となせ殿諸共に、跡の片付諸事萬事、何も彼も心殘りのなき様に、ナ、ナ、コリヤあすの夜舟に下るべし、我は幸ひ本藏殿の忍姿を我姿と、袈裟打掛て編笠に、恩を戴く報謝がへし、未來の迷ひ晴さん爲、今宵一夜は嫁御寮へ、舅が情の戀慕流し、歌口示して立出れば、兼て覺悟のお石が歎き、御本望をと計にて、名殘惜しさの山々を言ぬ心のいぢらしさ

手負は今を知死期時、父様申しと様と、呼ど答へぬだんまつま、親子の縁も玉の緒も切れて一世の變別れ、わつと泣母、泣娘、倶に死骸にむかひぢの、回向念佛は戀無常、出行足も立留り、六字の御名を笛の音に、南無阿彌陀佛なむあみだ、是や尺八煩惱の、枕並ぶる追善供養、聞の契は一夜限、心殘してへ立出る。

兩國橋引揚の段

柔能く剛を制し、弱能く强を制するとは、張良に石公が傳へし秘法なり、鹽谷判官高定の家臣大星由良之助是を守つて、すでに一味の四十四人怨敵高野師直を打取り、今會稽に旗上し、高輪泉岳寺へと志し、兩國橋へとさしかゝる、先一番に引上るは、大星由良之助由兼、原郷右衛門、大星力彌、竹森喜多八、大高源吾、後につゞいて義士のめ〳〵、着たる羽織の合印、いろはにほへとと立ならぶ大星聲かけ、いかに方々、かく本懷をたつせし上は、御首を御墓前に手向奉り、冥府にまします御主君に右の次第を言上し、上の御上意相待つて、各々覺悟有べしと、由良之助に制せられ、ゆゞし、勇し、かばしき皆一様の日本魂四十七騎の勢ひは四方の國々鳴り渡る、實忠臣の假名手本、傳へ〳〵竹本の、節も豐に鶴澤の、音にひびきて目出度けれ。

文樂の人形芝居

文樂座は現在日本に於ける唯一の職業的人形芝居です。

其發祥は寛政の末に淡路の人植村文樂軒が、今の大阪高津橋南詰西の濱側に、「高津新地の席」として人形淨瑠璃の櫓を起したのが始りで、文樂座の名乘りを上げたのは明治五年一月の事です。以來幾變遷を經て例の御靈境内から最近の四つ橋に到る迄、植村家四代の經營、次いで現在の松竹の經營に移り、亡び行く古典藝術の最後を守り續けて居るのです。

事實、東西古今を通じ、吾が人形淨瑠璃程藝術的完成品は有りません。其權輿から約五百年、竹本義太夫が當流を起してからも二百餘年の歷史を經て、今日の藝術的完成に到つたのです。

其昔片手遣の幼稚な人形から、今日の三人遣の複雜な人形—享保十九年十月竹本座上場の『蘆屋道滿大内鑑』の與勘平彌勘平に始ろ—に迄進歩するには、其間人形が口を開く樣になり、眼が動く樣になり、眉が動く樣になり又五本の指が動く樣になり、現在の樣な出遣も考案されて、幾多の名人の努力が積み重ねられて來たのです。

現在の三人遣の構成に就て云ひますと、先づ主たる遣手は左手を人形の背中から胴に差し込んで、人形の位置を定め、同時に右手で人形の右手を動かします。別に左遣と云ふのがあつて、人形の左手をつかひ、又足遣が足だけを動かします。但し女形には特殊の役の他は足が有りません。只足遣が裾を折つて足の樣に動かすだけです。

扨、此三人三樣の神經が凝つて一つの人形の魂となり、頭を中心として統一された演技が行はれるのです。これこそ長年の練磨に依つて、遣手三人の意氣がピッタリ合致しなければ到底出來得るも

のでは有りません。

次に人形の頭に就いて極く概略を云ひますれば、

文七—光秀、熊谷などに用ふ。

孔明—由良之助、菅相丞などに。

檢非違使—判官、久吉などに。團七—宗任、權太、團七などに。源太—十次郎、三浦之助などに。若男—勝頼、忠兵衛などに。金時—春藤玄蕃、松王などに。舅—師直梶原などに。陀羅助—端敵に。又女形では、ふけをやま—操、相模などに。娘—初菊、八重などに。新造—阿古屋、夕霧などに。婆—あたま（かつら）だけ取替て各婆役に。つめ—一人遣の仕出しに用ひます。

其他景清など、日向島の景清一役だけに用ひられる物もあり、非常に多種多様で、毎日扱つて居る人形遣にさへ、確然分らないと云ふ程です。又同じ浮瑠璃でも語る太夫の聲に應じて頭を變へる事もあり、到底科學的な分類は至難なのです。

御參考までに人形の動作の主なるものを擧げて見ますと、

一、腕まくり＝片腕をまくつて極り、或は見得をする科、立役によく用ひられます。

一、三つざし＝人形がとん〳〵と腰を落して、片足を出して極る形で、立役の人形が出て來て、いきなり見得をきる場合等に用ひられます。

一、六法＝芝居の六法と同じく、手足を動かして引込み等に用ひられます。

一、打込み六法＝右の六法に特に多くの下座やツケを入れて演る派手な科。

一、ギバ＝芝居の樣に一つ飛び上つて、足を前に並べ出して腰を落す動作。

一、片手後ろ向き＝女形のさはりの中でよく用ひられる人形獨特の美しい技巧です。

其他人形獨特の動作は枚擧にいとまない程で、それは實地に就て御覽下されば自然御了解になれるかと存じます。

次に勾欄に就て申し上げませう

文樂の舞臺で普通の芝居と違つて居る一つの特色は、勾欄です。これは古くから人形芝居の舞臺の中心になつて居るもので、創始時代には此勾欄が高く、人形遣も太夫三味線も、此蔭に隠れて、見物は勾欄の上に差し出された人形の動作だけを見て居たのですが、其後次第に低くなり、現在では人形遣の腰から下だけを隠す高さになつて居ます。

人形の舞臺と云ひますのは、奥七分が普通の舞臺面で、此所に屋臺を飾り、此屋臺の前が勾欄の際迄一尺二三寸落ちて居て是を船底と云ひます。勾欄は船底から二尺八寸、人形の舞臺面より一尺五寸の高さになつて居り、人形は此勾欄を地上の一線とする世界、それは人形の地面であり往來であり其所で彼は惱み喜び、かつ悲しみつつ息づいて居るのです。

吾が人形淨瑠璃の特色は云ふまでもなく、淨瑠璃と三味線と人形とが渾然として三位一體をなす所の妙味にあります。其の成立から云つても此三者は別業のものです一が他に追從す可きものでもなく追從さる可きものでも有りません各々が一つのものを揃き出そうとする努力が凝つて一體となり、其所に陶醉の世界が出現するのです。

が、此世界は現世を越へた、人の魂の世界です。それなればこそ吾々は人形に自分の魂を見出す事が出來るのです。悲しんで悲しめない、喜んで喜べない人の世なればこそ、人形は人の「内なるもの」をあからさまに見せて呉るのです。

昭和十三年七月八日印刷
昭和十三年七月十一日發行
府下南多摩郡小宮町西中野四〇一
編輯兼發行人　秋山于三
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷者　東興亮
東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷所　共同印刷株式會社

食堂喫茶店定價表

本館

三階

金陵亭
定食 一、〇〇圓鏹
四品御飯香物付
定食 一、三〇
五品御飯香物付
燒賣 三〇
燒肉麵 三五
炒飯・五目そば 四〇
其他一品料理

つるや
定食 一、三〇
五品御飯付
松 二重かさね辨當 一、〇〇
竹 刺身御椀付 八〇
同 御椀付 五〇
梅 同 三〇
外に御好み一品料理

よろづ家
紅茶・珈琲 一五
みつ豆 一五
御膳田舍しるこ 一五
御ぞうに 一五
御ビール酒 二〇
其他各種飲物 六〇

二階

各種賣店

日の出
大阪壽司 五〇
辨ちらし壽司 五〇
紅茶・珈琲 一五
つ當 一五
み豆 一五
洋菓子 一五

東洋軒
定食 一、三〇圓鏹
スープ外二品、プディング・フルーツ、コーヒー付
ビーフステーク 八〇
ペン又はライス付
其他一品料理
和定食 一、三〇
五品新香御飯
和食辨當（御椀付） 八〇

菊家
アイスクリーム 三五
紅茶・珈琲 一五
ソーダ水 一〇
洋菓子（二個） 一〇
サンドウキッチ 三〇
其他飲物洋酒各酒

地階

菊壽司
御壽司 五〇
御ちらし壽司 五〇
好つ豆 一五
ソーダ水 一五
菊正宗 三〇

金陵亭
定食 一、〇〇圓鏹
四品御飯香物付
定食 一、三〇
五品御飯香物付
燒賣 二〇
炒肉麵 二五
炒飯・五目そば 四〇
其他一品料理

一階

精養軒
紅茶・珈琲 一五
洋菓子 一〇
ソーダ水 一〇
アイスクリーム 一五
サンドウキッチ 四〇
其他飲物洋酒各種

別館

二階

辨松
御辨當 一、〇〇圓鏹
三重辨當 一、三〇
御膳 一、三〇
箱膳 一、五〇
本膳 二、〇〇

休憩室（ラヂオ新聞）
定食 一、三〇
うなぎ重 一、〇〇
うなぎ御膳 一、〇〇
うなぎ丼 八〇
とり定食 一、〇〇
とり御辨當 一、〇〇
外に丼物一品五十錢より六十錢

各種賣店
體量器

一階

三芳
洋定食 一、三〇圓鏹
和定食 一、三〇
御辨當 一、〇〇
金ぷら御飯 一、三〇
其他洋食一品料理飲物

神田川

御注意

◇御食事は一幕前に御注文下さる方が御便宜です。
◇自動電話は本館一階正面の両側に御座あります。
◇お煙草は本館三階と別館二階の賣店に御座あります。

◎ミツワフレーク

布地を損めない、鱗片狀の高級洗濯石鹸

ス・フの時代来る

ス・フの保ちは洗濯ひとつてず！

定價二十錢

ムラのない石鹸液が出來るから手早く洗へて濯ぎが樂です。遊離アルカリを含まないから染色と耐久力をまもります

◎ミツワ石鹸本舗　東京・南鮫　丸見屋商店

許特賣專

ラオゼ

磨齒用藥

新しい主劑に依る
遙かに進んだ齒磨

從來にない吸着と置換の兩作用で蟲齒、齒槽膿漏、口臭などを根本から豫防し、また使用後に獨得の清爽感を殘します

25セン

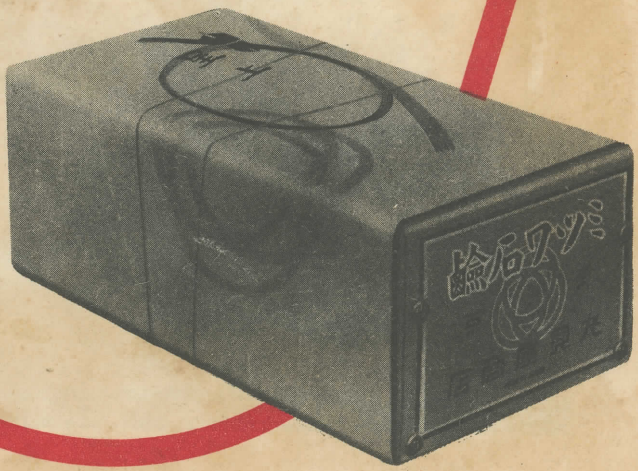
發賣元　東京日本橋兩國◎ミツワ石鹸本舗藥品部

中元暑中の御贈答用品

眞面目な御家庭向
の贈物として本品
の御利用は年々增
して居ります何卒
本年も此實用品を

ミツワ石鹸

世界最高級の標準石鹸



定價一部 金二十錢

本舗 東京日本橋兩國 ◎ 丸見屋商店 電話代表二一二一番 振替東京一七〇番

昭和十三年七月興行

一日より十三日まで

毎夕四時開演

大阪

文樂座人形淨瑠璃芝居

全員引越特別興行

新橋演舞場

納涼園

開園

七月十日

毎夕六時より

東京會館

ヱビスビール

中元・暑中
御贈答の最適品

体裁優美
一打入
半打入
化粧箱

このビールには
麥芽糖、蛋白質、アミノ酸、燐酸鹽
など人體に必要の成分がごく吸收さ
れ易いかたちで含まれて居ります。

大日本麥酒株式會社

建築の雄
設備の完
宏壯豪華の大殿堂！

風雅にして
高尚なる舞台附大宴會場落成

自慢の御座敷五十余室
明朗な休憩室と娯樂室
自然の元湯と養老の湯
最も樂しき家族風呂
大衆的な温泉大プール

御宴會は五百名様まで
御手輕食堂も增設
御茶代は謹んで拜辭
然しサービス料は一割
御一報次第係員參堂

相州湯河原温泉
温泉旅館
温泉大プール
清光園

電話 長 一 六七番 三三番

箱根
湯本温泉
玉翠荘
電湯本一一〇番

元箱根
橋本屋旅館
電箱根町ア番

湯河原
伊藤屋旅館
電湯河原四・七六

湯河原
若松屋旅館
電湯河原四八番

熱海
うろこや旅館
電熱海三〇五四・三六三三

熱海
眞誠館
電熱海三四四番

伊豆山
中田屋旅館
電熱海一〇三一番

伊東
松林館
電伊東四五番

熱川
福島屋旅館
電奈良本五・二八

長岡
さかなや
電長岡三・二八番

修善寺
仲田屋旅館
電修善寺一三・六一番

蓮台寺
石橋旅館
電下田一〇六番

土肥
土肥館
電土肥三〇・五一番

伊香保
古久家旅館
電伊香保五・〇五番

伊香保
石坂旅館
電伊香保一三八番

水上
神峡樓
電水上七八ア・七五二番

水上
菊富士
東京別館
電水上一〇番

越後湯澤
高半旅館
電湯澤九番

越後湯澤
稲本旅館
電湯澤三四番

長壽館
電葉ヶ京五番

鬼怒川
鬼怒ノ湯
水明館
電鬼怒川四三番

川治
柏屋ホテル
電川治三・一〇番

那須
松屋旅館
電那須二五・三六番

浅間
たかの湯旅館
電板本三六・五九番

湖來
あやめ館
電潮來一六・二七番

月弗ひ一圓で
四泊の旅

株式會社
湯行會

御報次第
案内書贈呈

京橋區本挽町四の三（歌舞伎座角）電京橋八五三三

博多割烹 多多き 鯛茶漬

本場ノ庖丁酒ハ褒紋正宗
座敷ハ京風粋座
酌ハ丸髷優雅ノ粒撰リ
値段ハ英断的大値下ゲ

○御宴會は特に勉強致します
芝居の御歸りにせひ(十二時迄営業)

博多名物元祖 彩三浦
銀座八丁目資生堂裏
電銀 三四三

和洋室共、一室 三円均一
(一室二人様迄割増金なし)
便利で閑静
和洋武美室
室料制度
茶代祝儀全廃
投宿時間 毎夜時迄
新橋ホテル
新橋駅東口前
電話銀座五二七〇番

作憚口上

御ひゐき皆々様彌々御清祥の段大慶至極に奉存候 扨て當る七月興行の儀は當座十年振りにて大阪名物文樂座人形淨瑠璃を迎へ本邦特有の由緒深き世界に誇る古典藝術の御鑑賞を願ふ事と相成り候 太夫、三味線、人形遣も斯界の一流、全員久々にて上京仕り懸命の努力を以て御高覧に可供候、殊にこの度 つばめ太夫改め竹本織太夫、團二郎改め竹澤團六両名襲名御披露申上ること、相成り候條相變らずの御引立奉希上候 尚上演狂言の儀も名曲數々取揃へ國民精神總動員の本領に從ひ必や健全なる御慰樂の御期待に添ひ得るものと確信仕り候間 何卒倍舊の御引立を以て陸續御來場の程伏て奉懇願候

敬白

佃煮
暑中元にも避暑に 特殊 玉木屋
電銀三四七四

富士五湖 本館 河口湖ホテル
電話神田一三番

州房 鴨川 竹乃屋旅館
電鴨川一〇六・二四七

州房 天津 中屋旅館
電話天津五一番

州房 小湊 吉田屋旅館
電小湊五二番

大島 波浮港 松友館
話波浮一一番

團体旅行に 統後の保健に
各地旅行の案内所
保養滞在に 案内所利用を

京橋區木挽町四の三(歌舞伎座角)電京橋八五三三

伊豆に名所が又一つ

敷地一萬五千坪
舞台附百疊大廣間
次の間附室三十餘
社交室、撞球場
讀書室、暗室
大浴場、家族風呂
溫泉プール、等々

日本隨一
全館
數寄屋造り

下賀茂溫泉
ホテル
伊古奈

電話伊豆南中三〇番三四番

東京御案内所

牛鳥割烹
安田本店

新宿駅前 電話四谷一一七番 一二四番

京橋木挽町（歌舞伎座角）
溫泉旅館案内所
電京八五三三番

御申込次第案内書呈上致外

ビフテキ

お茶漬
鮑の貝付焼
車海老フライ
いせ海老サラダ
チキンカツ
カレーライス

ザンギ
ウラ屋坂松
スエヒロ
電(57)〇九二〇

午前十一時より
午后十二時まで

横濱市勝天通り四丁目・店支

西洋支那料理、喫茶
新橋 つばめ
一二階輕食三階グリル四階座敷
新橋驛前
(銀座口)
電銀(57)〇三七八
(54)四八二五

藝題四回替り

第一回	一日より四日まで	四日間
第二回	五日より七日まで	三日間
第三回	八日より十日まで	三日間
第四回	十一日より十三日まで	三日間

萬國名物麺料理
元祖 長壽庵麺舗
おみやげ 大代麺味そば 菓子
銀座七丁目
電銀五一九番

ふるさと
銀座五丁目
若松
電銀三四九
三二五三

假名手本忠臣蔵

殿中刃傷の段　鶴澤吕太夫

裏門の段　鶴澤伊達太夫

花籠の段（つぼめ太夫改め鶴二郎改め）　竹本織太夫

判官切腹の段　竹澤大廣隅太夫

霞ヶ關の段　鶴澤一長尾太郎右工門

身賣の段　鶴澤相生太道八

早野勘平住家の段　豐澤清太夫

祇園一力茶屋の段　豐竹相生太夫

由良之助　重太郎　喜太八　彌五郎　おかる　主内　亭主　伴内　九太夫　平右工門

豐竹宮さの太夫　豐竹伊達太夫　豐竹逢瀬太夫　豐竹若太夫　豐竹隅田太夫　豐竹相播太夫　豐竹織太夫　豐竹友工太夫

道行戀の初旅

豐竹呂太夫　豐竹辰の太夫　豐竹錦太夫　豐竹松島左工太夫　豐竹新治郎左門夫　豐竹寛吉太夫　豐竹吉左郎季夫　豐竹友三郎夫　豐澤清右工門夫　豐澤一耶太夫

山科閑居の段　中切

竹澤本長尾太夫　竹澤吉津綱太夫　竹澤本造夫　野澤鶴造夫

兩國橋引揚の段

豐竹宮さの太夫　豐竹辰の太夫　豐竹若隅太夫　豐竹相團太夫

桃井若狭之助（人形）殿中刃傷の段

高野師直　菜道珍官才　鹽谷判官　加古川本名蔵

吉田文ぜ十い　桐竹門造　桐竹紋司郎蔵

大吉田玉作

早野勘平腰元取鷺坂伴内　豐澤吕太夫

裏門の段　吉田玉ぜ五郎三

顔世御前　大星力彌　原郷右工門　斧九太郎左工丞　石堂馬之丞　藥師寺次郎官　鹽谷判之助　諸士

谷の段　吉田玉ぜ五郎三　桐竹紋政三郎　吉田玉紋小兵太郎　桐竹田政龜　吉田玉紋榮十郎幸　桐竹田玉榮三郎藏　大吉田玉ぜ五郎三い

勘平住家の段

與市兵衛女房お袁　吉田玉五郎七　吉田玉文市郎三　吉田玉榮兵衛平　吉田玉文次郎八　吉田玉小多瓢六　吉田玉壽兵衛吉呂作　吉田玉文小兵衛

早野勘平　文字屋才兵衛　野ぼう彌　ケ島の角兵衛　原郷右工門彌五郎　千崎

祇園一力茶屋の段

斧九太郎伴内主　坂内亭　伴亭　一力主　鷺文　間寺次郎　力彌　森喜太郎　重太郎八　矢喜重郎　竹田玉紋太郎　千田玉萬次郎　崎田文門造　森田文之助作　彌田榮五郎　喜田玉文七郎　重田文市郎三　太田玉五郎　吾田玉文次郎　士田榮三郎

大星由良之助　霞ヶ關の段　吉田榮三

妻戸道行戀初旅　桐竹紋十五郎

娘妻戸小無浪瀬　吉田文五郎

山科閑居の段　桐竹紋十郎

娘妻戸小無浪瀬　吉田文五郎

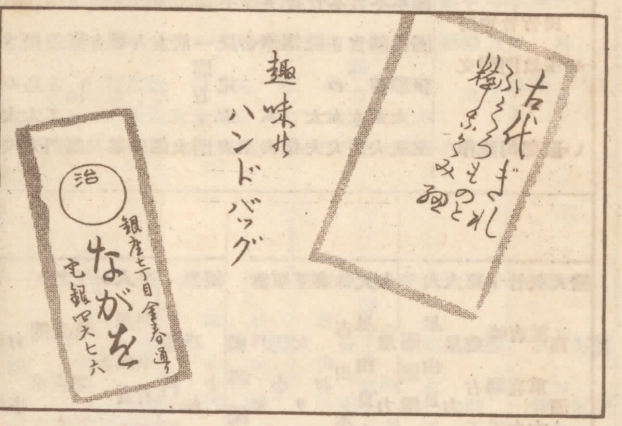
加古川本蔵　大星由良之助　妻戸小無浪瀬　下女おりん　吉田玉榮三郎　桐竹紋政龜　桐竹田玉榮三郎藏

大星由良之助　兩國橋引揚の段

大星力彌　原郷右工門彌　崎森喜太郎　彌五郎八　千竹文門造　矢田文之助　大吉田玉作　諸士

高野師直　聞珍官　重喜太郎　源太郎　吾士郎

よ
コロッケ
名代
図
揚たて
食べケそば
天そば
あられそば
茶そば
ゆずちそば
そばちそば
銀座寿司
よし
寿司
接客係
三階小座敷の
特利用を
銀座資生堂横金春通
電銀(57)〇六二七番


古代ぎし
趣味は
ハンドバッグ
治
銀座七丁目金春通り
ながを
電銀四六七六

ベニヤ
婦人洋品店
京橋銀座七丁目
(金春通り)
電話銀座二二八四番
ショール
バラソル
ハンカチーフ
御肌着類
中元暑中の御贈答に

関西料理

出井（いづゐ）本店

銀座西六丁目

電話銀座一四九四・一三二

名物

鯛頭山椒焼

立食

室内

京橋

一丁目

ヒゲの天平

天ぷら立食二限

電話京三二九五

つばめ大夫
吹めば吹め
二郎

竹豊鶴野豊竹鶴竹豊竹鶴竹豊竹鶴豊竹鶴竹

澤本澤本澤本澤本澤本澤本澤本澤本澤本澤

綱津清古新綴廣大道相呂鱗織友伊吉辰寛長

左勒　隅太　生叶太　衛太　建太　尾治

太郎　太夫丸　太夫門　太夫六　太夫　太夫八　太夫助　太夫門　太衛太　太夫六　太造

江戸の趣味

風流おせん

中元
暑中の御贈答に

京橋銀座七丁目（金春通）
電銀五四七九番

銀座

壽惠廣

清佳片（セイカヘン）

高級保健
爽快芳錠

三階賣店にあり

高木清心丹本舗

割烹 尾糸

生粋の江戸前
即席割烹
慢の季節料理

銀座七丁目
消防署前
電話銀座一五四一

皆様の

熱海温泉
海水浴前

新館茶代廢止

高橋旅館

大廣間大風呂
御家族本位
電話二八二〇番

御食事は
美味し支那料理
本館
地下室食堂
金陵亭で

御定食は一圓より
お好料理は二十錢より

お食事は一幕前に
御注文が御便利です

●三階にも出張店が有ります御利用を

小倉アイス
みつ豆

銀座七丁目
吉岡野
電銀一八四〇

御入場料（入場税を含む）
一等　四圓
二等　二圓八十錢
三等　一圓八十錢
三階　八十錢

新橋演舞場

電話
銀座（57）
三七五七　切符賣場
三七五八
三一八九　事務所
二七〇七　劇團
三七六〇　業屋

西洋支那料理、喫茶
新橋　つばめ
一二階乾食三階ダンス四階宴殿
新橋驛前（銀座口）
電銀（57）〇三七八
四八二五

名菓　ちぐさ
代名　東まんぢゅう　一個五錢
江戸の四季
銀座七丁目
筑紫
電銀二九五

岩谷冷藏器

……の岩谷

機械冷藏庫

魚店・肉店・料理店等多の量
冷藏に最適營業の氷のいいら
昌盛グロタカ　置裝械機代近的

氷の溶け少く・よく早く
冷え・冷却力大强力にして系
器藏冷的經濟なぬ變に久
昌盛グロタカ・醫藥・百貨・強餘・用藥・御用家庭

東京・銀座
岩谷冷藏株式會社

時雨蛤

御中元御贈答に

歌舞技座前
桑名貝新直營
電話銀座二〇〇六

左の御用の時は……

各劇場及種々の催し物のプログラム及番組の廣告と印刷の……御用は

大型遊覽自動車に依る十五名以上樣の御清遊の……御用は

開店、賣出し、特賣等の店頭裝飾から廣告の印刷圖案文案の……御用は

センデン社へ……！

京濱藝地一ノ五
電京七四五二

ルービンリキ

トウタスンリキ

清涼飲料　キリンレモン

幕間は別館階へ
神田へ

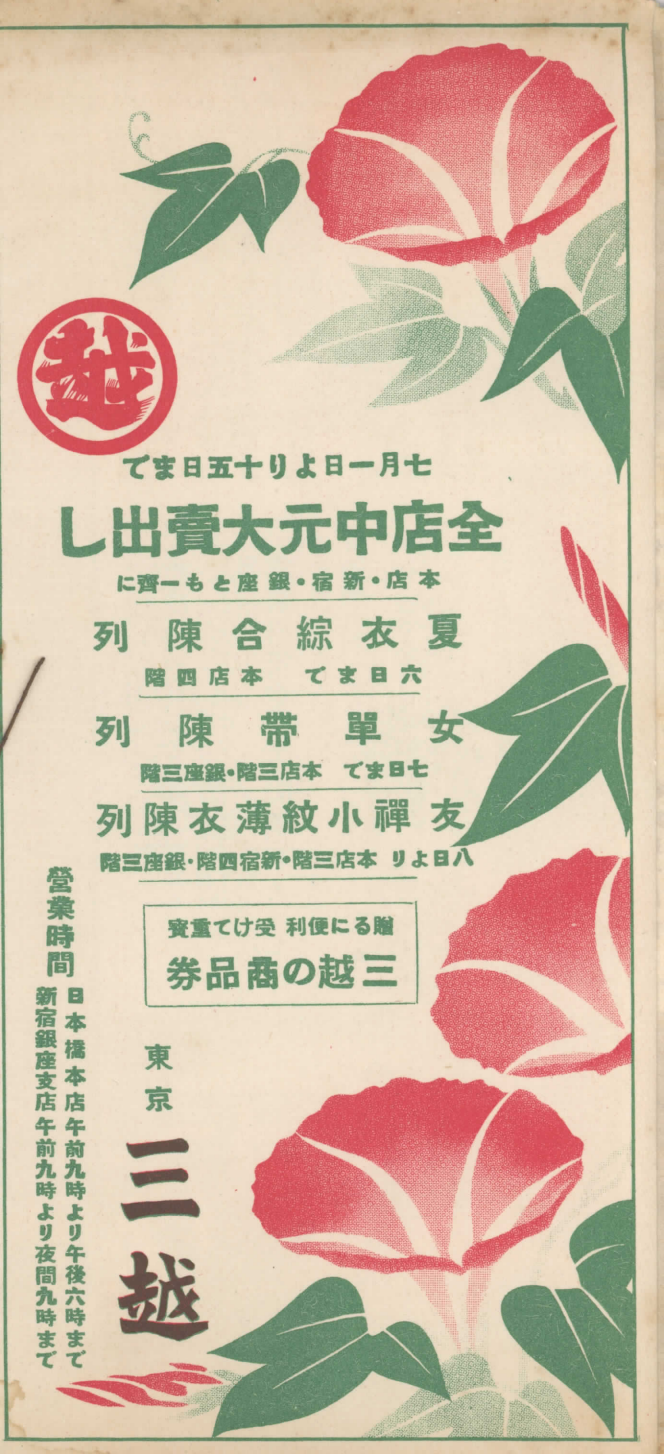
御宴會
御結婚披露
グリル

庭の御食堂
御散策の折には眺望佳き當軒獨自の
庭の御食堂を御利用下さい……

株式會社 上野 精養軒

御園遊會……大小如何樣にも御取り計り致します

電話下谷 自二九一番
至二九五番


越
七月一日より十五日まで
全店中元大賣出し
本店・新宿・銀座と一齊に
夏衣綜合陳列
六日まで 本店四階
女單帶陳列
七日まで 本店三階・銀座三階
友禪小紋薄衣陳列
八日より 本店三階・新宿四階・銀座三階
贈る便利 受け重寶
三越の商品券
東京
三越
營業時間
日本橋本店午前九時より午後六時まで
新宿銀座支店午前九時より夜間九時まで